ドジュレ
DOZULÉ

日本語版

≪私は　自分のメッセージで　この世を救いたい。≫

（第３４回目の御出現，１９７５年9月１９日）

ド　ジ　ュ　レ

独特で　決定的な

キリストのメッセージ

１９７２年〜１９７８年

人の子の印である

光栄の十字架は

１９７２年　空に６回　あらわれた。

≪その時，人の子の印，空に現われん。

その時また，地の民族ことごとく嘆くであろう。≫

マテオ　24,30

光栄の十字架の印

「主の十字架を見よ。」「あなたはこの十字架が知られるようにし，あなたはそれを背負うであろう。」

（ 1972 年3月2 8日）

「光栄の十字架，あるいは　人の子の印は復活されたイエズスの光栄のうちの真近なる再来の前兆である。この十字架が大地に建てられるであろう時，私は全てのものを私のもとに呼びよせるであろう。」（ 74，5／3 ）「諸国に天主は御自分の卑女の口を使ってお語りになったと言いなさい。天主は彼女に大いなる試練は近いとお示しになりました。何故なら彼女は…人の子の印…を見たのですから……。激しい苦しみの日々の後，その時，天に人の子御自身が大いなる威厳と至上の力とともに現れ，世界の隅々より選ばれた人々を集めるでしょう。幸いなるかな罪を悔やんでいる人　何故なら彼らは永遠の生命を得るであろうから。」

（ 1974年 11／1 諸聖人の大祝日）

「喜びなさい，人の子が光栄のうちに再び来る日は近いのだから。」（74，3/1）「この若い世代は　それを避けて通ることはないであろう。」（75，7/4）「今世紀末の前に 」。（74，3/1）

「教会の頭たちよ，まことに私はあなたたちに告げる　将来諸国が救われるのはまさに　地上に立てられたこの十字架によるのである。」「このメッセージの愚かさを聞きなさい。何故なら天主がこの世を救いたいというのは，このメッセージを通してであるから。」（75，9/19）

さて，マドレーヌ＊になされた啓示の要点をここに書きましょう。光栄の十字架とはイエズスの再臨が真近いしるし。人の子のその印が「知られるように」するとはイエズスの第一の要求。
「あなたはそれを荷なうであろう」はおそらく無理解と，この印が「知られるように」するというくわだてに対する障害との結果以外の何ものでもありません。第２の要求は，光栄の十字架を建

立すること。

以上がメッセージのおろかさであり，世にとってはつまづきである十字架のおろかさであります。

マドレーヌが受けたのは「個人的啓示」ではありません。それは　この世界中全ての人々にとっての諸国にとっての，「教会の頭たち」にとっての，また，教会にとっての警告なのです。それは単に一司教区だけに関係あることでも，フランスの教会だけのことでも，ローマ教会だけのことでもありません。その事件は，その重大性において，その普遍性において，また，イエズス御自身がそれに与えた緊急性において，３つの並みはずれたひろがりをもっています。その時「地上に立てられたこの十字架」が巨大なものでなければならず，カルワリオという一地域だけのものではないのであるとわかり，その足元には，全世界から，全教会から信者が罪を悔いに来て，そこに和解の至聖所が建立されるのはもっともであると人々は思うのです。

ジェラール　C.

＊　１９７２年3月２９日から１９７８年１０月６日の間，ノルマンジー地方のドジュレにて（フランス）

序　　文

この小冊子には，1972年3月28日から，1978年10月6日迄，私たちの主イエズスキリストによる，ドジュレでの，度々の御出現とマドレーヌに語られた数々の御言葉の物語が書かれています。これは，彼女が書いたノートと，この事件の当時居合わせた司祭と修道女たちの調書とによって書くことができました。マドレーヌは，これを読み，確認しました。

「神がこの世を救いたいというのは，このメッセージによってである。」（34回目の御出現　1975,9／19）ローマカトリック教会の一部のキリスト者は，あなたに，この「天主の御言葉」を読み，じっくり考え，そして，配布してくれるようにお願いしています。

「天主の御言葉」は「机のひき出しの陰で眠っているわけにはいかず，かえって全世界にとって真理と光とにならなければならない」のです。（３３回目，７５年７／４）　なぜなら，「人類は私のメッセージを知るまで，そしてそれを実行に移すまで，平安を見い出すことがないであろう」からです。（36回目，75年12／25）

「喜びなさい，主において，絶えず喜びなさい」（10回目,73年９／７）「常に喜びのうちにいなさい。この世代におこる全体的な大異変を嘆き悲しまないように。何故なら，このこと全ては起こらなければならないのだから。しかし，空に人の子の印が現われるのを見なさい。」（11回目 73年10／5）

≪VOS AMICI MEI ESTIS,
SI FECERITIS QUAE EGO PRAECIPIO VOBIS≫

もし，あなたがたが　私の命ずるところをなすならば，あなたがたは　私の友である）（１０回目，７3.9／７）

宣　　言

教皇ウルバノ八世によって定められた規則に従って，私たちは聖座と私たちが忠実に従っている教会との判断に先走ったことは，何一つ主張いたしません。

1966 年１２月２９日のA,A,Sの中で，信仰の教義に対する聖省の勅令が出版されました。その勅令によれば，教会認可（Im-primatur)なしでも，出現と啓示に関する書きものを配布することが許されています。

恵まれた霊魂

マドレーヌは1924年10月27日，オートビュト山のふもとに位置するノルマンジーの寒村，ピュトタンノージュに生まれました。ピュトタンノージュは，比較的重要なドジュレの所属地域に属しており，ドジュレには，修道女たちによって運営されている聖ヨゼフ小学校があります。

彼女の両親は，ある大地主に35年間やとわれた後，数年前にすでに買入しておいたある小さな家にひきこもります。彼らには，3人の子供たちがありました。1913年に生まれたジャンとマドレーヌと1927年に生まれたピエールです。

マドレーヌは婦人服飾店の縫子として奉公したのち，1948年8月14日に結婚しますが，それは，父親の死亡したすぐあとのことでした。母親は，新しくできた家族と一緒に同じ家でひきつづき生活することになります。彼女は今でも家族の親切でおもいやりのある世話にかこまれて，生きており，93才です。そうして5人の子供が，全員ピュトタンノージュで生まれます。その家は，たいそう小さくなりましたので，1968年に，一家は，もうすこしすごしやすいドジュレの一軒家に身をおちつけました。そこは，学校にも，公教要理にも，教会にも近いところでした。マドレーヌと彼女の夫とは，やはり苦労がともないましたが自分たちの5人の子供たちを育てます。

そして，1970年母親にすこしすすめられて，彼女は，「御復活祭の聖体拝領」を以前のようにやることにしました。これは，ピュトタンノージュの教会には，もはや司祭がいなかったために4年もするのを怠ってきたものです。熱心に告解をしたあと，彼女は，御復活祭当日と，次の日曜日に聖体拝領しようと決心するのです。

さて，御復活祭の次の日曜日，聖体拝領の後ひざまづこうと元の場所に着く前ですら，「私には説明することのできない何かが

生じました……。私は，何か，急に体の力が抜けてしまったかのように感じました……。私は，喜び，幸福感であたかも酔ったようでした。別の世界を発見したように私には感じられました。」そして，これは，彼女が自宅へ帰るまで続いたのです。一週間中彼女はそのことを考えますが，分かりません。そんなわけで，信仰によるというより好奇心ゆえに次の日曜日，1970 年 4 月12日に早く御聖体拝領したくてたまりませんでした。

そして，彼女にとって全く別の人生が始まったのはその日からでした。改めて「この内的よろこびが私を支配しました。でも，今度はこの世のものとはいえない，ある存在を感じていました…。イエズスの存在を，聖霊の存在を。ある超自然の力が体にとりついていました。えもいえない甘美な存在……。世界はもはや存在していませんでした。私の体も，もはや存在していませんでした。私の内に天主が，天主の内に自分がいる他は何もありませんでした。」

自宅に帰ると，彼女は自分が変わっているのに気付きます。彼女の霊魂は，よろこびで一杯です。そして，このよろこびは，決して彼女からすぐに離れません。そういう訳で，あらたに聖体拝領するために聖霊降臨の主日を待つというのは，論外のことでした。復活祭後の３番目の主日，４月１９日に，「この奇跡のようにすばらしいよろこびが，再び生じ」彼女はうれしくて涙を流します。そのような秘密は，司祭以外には理解することができないので，彼女は，主任司祭に自分の秘密を打ち明けようと決心します。「生きているのはもはや私ではなく，私の内に生きているのはイエズスであります。」と。その司祭は彼女に，一週間聖体拝領をするようにとりはからってくれます。「次の日曜日を待ちわびるというのは，あまりにも長い……。御ミサにとってかわりうるものなどなにもないのですから。御聖体の内にましますイエズスだけが私を迷いから救ったのです。御ミサの時，毎回，私は本当に司祭を通して，御受難の前日の司祭の身振りのうちに，イエズスを見るのです。私は，天主の霊が御自身を，私たちすべて

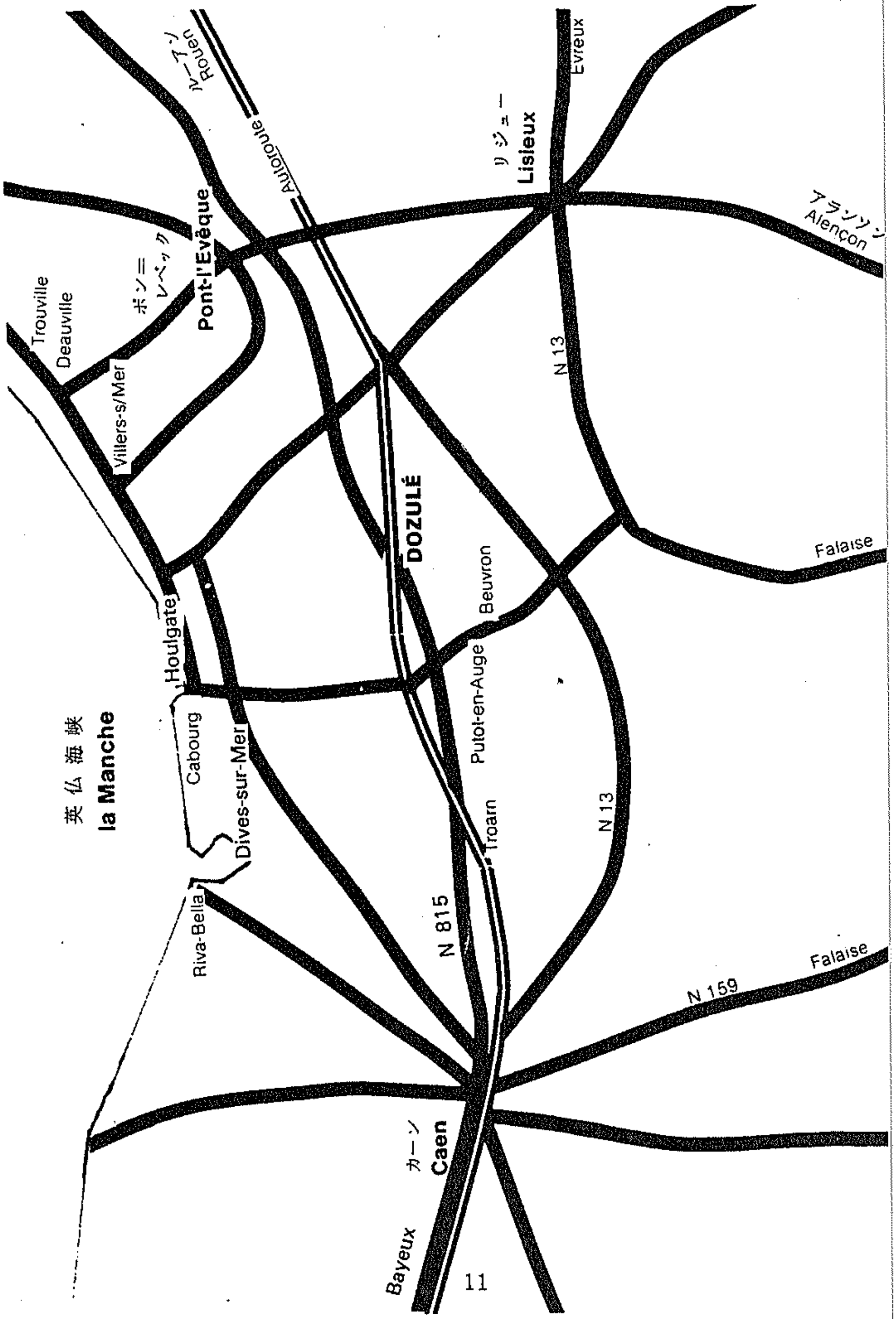
に与えるために，祭壇にお臨みになるのを見るのです。」

次第に，彼女は，純粋に子供のようになることによって，天主をよろこばせたく思いました。色々な心配事は忘れ去られ，彼女の人生は変わります。彼女は，以前，人生を少しも楽しいことなく，むしろ，もの悲しいものだと思っていたのにもかかわらずです。「全ては変わりました。まるで，私たち一人一人に御自分をお与えになったイエズスへの愛から毎朝，全てが神にささげられているかのようです。キリストは御復活され，本当に生きておられます。毎日毎日私はこの御復活を生きる…。決して，ただの一日といえども祈りなしにすごさせないで下さい。イエズスのことを，彼が苦しみ，涙を流したすべてを，考えることがなく一日をすぎさらせないで下さい…。祈りは私たちを天主とむすびつけ，私たちに，全ての物質的な財産でも置きかえることのできない霊的よろこびを与えてくれます。科学も人間の知恵も，美しい言葉も信仰のない者の心を天主へと開かせることはできないと言えます。改心は人間の仕業ではありません。天主が御自分の霊で彼をひきつけなければならないのです。聖霊の助力なしには人間は何一つなすこともできません。天主の霊なしには，私たちは無ですから，「愛をこめて」祈る必要があります。天主は，私たちを絶えず見守っているのです。すべての人々にこう言って下さい。「天主は毎瞬毎瞬，徹夜番のようにじっと私たちを見守っています。もし，私たちがそれを知って，それをよく理解したなら，私たちは天主に感謝することができます。天主だけがそのように人間の心を変えることができます。しかし，天主様の恩寵を受けるために，信頼して，信仰をもって多く祈らねばなりません。」

「私の霊魂のうちでは，全てが天主様をほめたたえています。花々と，その香りや木々が，朝露が，存在するものすべてが生きとし生けるものが，です。それは，天主の息吹きなのです。何故なら，ここ，この地上では，全てが天主を褒めたたえているからです…。私は，天主の存在を疑っていました。人生はたのしいことが一つもなく，悲しいものでした。育てなければならない五人

の子供。お金の欠乏。でも，1970 年の4月１２日から，私にとってそれは，魂の，霊魂の復活でした。色々な心配事はどこかにすっとんでしまって，この内的平安がこの地上に存在する全ての上に上がってきたのです。…」

マドレーヌは，このようにして，神に感謝をする２年間をすごし 1972 年の枝の主日になりました。昨年の 1971 年と同様にキリストがこの世を全て救うために，かくも多く苦しまれた聖木曜に，すっかりあずかりたいと望んでいました。そうして，この３月２８日聖木曜日をむかえることになります……。


英仏海峡
la Manche
Trouville
Deauville
Villers-s/Mer
Houlgate
Cabourg
Dives-sur-Mer
Riva-Bella
ポンニ
レベック
Pont-l'Evêque
ルーアン
Rouen
Autoroute
リジュー
Lisieux
Evreux
アランソン
Alençon
N 13
DOZULÉ
Beuvron
Putot-en-Auge
Troarn
N 13
N 815
Falaise
N 159
Falaise
カーン
Caen
Bayeux

最初の御出現

1972 年3月28日　聖木曜日　午前4時35分

マドレーヌは，自分の寝室の窓をあけたあと，聖三位一体に対する祈りを，毎朝やるとおりに，始めました。彼女の夫は，毎日4時半に工場へ働きに出かけるのです。

彼女は，その時，空の少し右手にひとつのまばゆい閃光に気がつきました。

おびえてしまって，彼女はもう一度ベッドにもぐりこみ，おそらくあれは「U.F.O」だろうと思いました。というのは，それを見たと断言する人々がいますから。

8分から10分後に，彼女は窓の所に戻りました。もう何もありませんでした。と，突然同じ場所に光り輝く巨大な十字架が空にあらわれたのです。十字架の中央で結びつくように4つの端つまり，下，横木，上からはじまって，ゆっくりと，同時に形づくったのです。

横木と上の切り口とは，まっすぐ平らでした。その十字架は巨大で，垂直で，感動的で，すばらしく，まばゆく光っていましたが，見るのは容易でした。そして，全地平線をかがやかせていたのです。「ドジュレにあるカルワリオの十字架に近づいて見たときよりも少しだけ大きかった。」と彼女は説明します。

（しかし，マドレーヌは，この説明が自分の見たものを説明することができないと知っていると言いました。）

彼女がほんの数秒待つと，力強く威厳に満ちた尊い御方の声がこう聞こえたのです。

≪Ecce Crucem Domini≫

その声は，まるで教会の中のように響くのです。そこで彼女は，十字架のしるしをします。

次に，優しく，たいへんゆっくりと彼女の隣りで別の声がした

ように感じます。

≪あなたは　この十字架が世に知られるようにし，
あなたは　それを荷なうであろう。≫

さらに数分たつと，全てが「一挙に」消えてしまいました。彼女は，意味の判らないこの３つの単語を書こうと，ちいさな紙切れをとりました。

彼女は２時間程泣きました。というのは，
「どうやって，この十字架が知られるようにするの？」…
「皆に，そのことをどう話したらいいの？」…
「どうやって，イエズスがそこにいると，彼の十字架が世界を支配していると説得させるの？」イエズスの御命令に関しては，
「誰一人として私を信じないでしょう。」

「御出現をうけたのは聖人方以外にはいらっしゃらないと思いました。」「私はみじめな被造物で，哀れな罪を悔ている罪深い女にすぎないのに。」
彼女はこうつけ加えます。

その同じ朝，御ミサの後に，マドレーヌはロルセ神父様（その教区の司祭）に，この３つのラテン語の意味を尋ねようと決心します。彼はびっくりしてその出どころを聞きますが，これは無駄なことでした。そして，彼女にその訳を教えました。＜主の十字架を見よ＞と。

マドレーヌはとてもかなしくなりました。というのは，彼女はミサの間，霊的存在をすこしも感じず，もうあの素晴しい十字架を決して見ることはないであろうと考えたからです。彼女は打ち捨てられたように感じますが，しかし，たいそう平静にとどまり，たいそう大いなる平安のうちにいます。これは約２週間続きます。

ようやく彼女の霊魂は，内的な強い喜びで満ちあふれます。彼女にはその理由がわかります。もしイエズスご自身が彼女に御自分の十字架をお見せになったのなら，それは彼女を捨てるためで

はないし，それが，単に彼女だけのメッセージではないのだということです。

しかし，マドレーヌは2つに引き裂かれたようでした。彼女の極端に控え目な性格と，この十字架が世に知られるようにするというのは，両立し難いものですから。死んでしまうのがほとんど解決の手段のようでしたが，これはもちろん，彼女の心をのみ，かすめた考えでした。

マドレーヌは今や，長い間，深く，全般的によく考えて生活しました。

「この十字架は，この世を支配している。しかし，この世は，そんなことは思ってもいない，または，それを無視している，あるいは，それを忘れている。ところが，十字架こそが世の唯一の希望なのに。十字架こそが私たちを救うべき所，イエズスが私たちをあがなうために，かくも苦しまれたことを想起させてくれる所なのに。」

しかし，マドレーヌの内でこの幻影がひき起したおどろきと，不思議は，1970年4月以来彼女が感じている霊的喜びとは異なるものであり，それを上回るものではありませんでした。彼女は，こう書いています。

「本当の幸福とは，それは霊的よろこびであり，自分の霊魂がイエズスの霊魂と結合することであり，あたかも子供が母親に導かれるように，我が身を聖霊にまかせることです。」

「聖なる聖体拝領のうちに，主を受けたてまつる全ての人々に，主が私にたまわった霊的喜びを，彼らが私のように毎回の聖体拝領のうちに，主の実在のまことの喜びを汲むことができることを，知らせてあげて下さい。」と，彼女は天主に，祈りのうちに慈悲深く付け加えました。

1972年3月30日聖木曜日に，マドレーヌは，何度も彼女の見た十字架の幻について知りたいと言いつづけていた司祭に，告解し，そこで詳しく説明しました。

「このような秘密を守るのは時々むずかしいのです。」と彼女は

書いています。彼女はそれを８３才になる自分の母親にも，自分の夫にも漏らしませんでした。

２度目の御出現

1972年１１月８日　水曜日　午前4時３５分

マドレーヌは腕をまっすぐ左右にのばして，十字架を形づくって窓辺で祈っていました。

驚くほど美しく，この世のどんな光とも比べることができないほど美しく光り，透きとおった「光の十字架」が形づくられました。しかし，最初の時と同様に，まず十字架が現れてから，目もくらむばかりの光があらわれました。

こうして，彼女は耳元で優しいけれども悲しそうな声がこう言うのを聞きます。

≪償い，償い。今はイエズスを愛さない罪人を全て救う時です…。≫

次に彼女は，人類に迫りくる脅威に関する秘密を受けます。

「人々が天地の創造主を忘れ去ってしまう程，増々大きくなる進歩によって，世界は非常な大混乱におちいってしまいました。しかし，十字架を通してこそイエズスはこの世と悲しみとを救うために来るのです。心身の苦痛と悲惨は，終りをつげるでありましょう。その時，それは終り，平和が，…。そうです，天国の光を見つけるというのは，何と素晴しいこと。その光は，暮れることがないのです。でも，天主が私たちに，告げ知らせてくださった全ての素晴しいものをいただくためには，清い心にならなければなりません。今は改心の時，償いの時ですから。…」

マドレーヌは悲しみました。涙を流さずにはいられませんでした。ミサが終って帰りがけに，普段はないようなことなのですが，例の司祭が，彼女に「どうしてそんなにも悲しいのですか？」と尋ねました。マドレーヌは安心して，彼にその理由を詳しく説明しました。

3 回 目 の 御 出 現

1972 年１２月７日　木曜日　午前４時３５分

同じ場所に，稲妻の様にまばゆい光が，次にあの素晴しい十字架が，３回目に現れます。マドレーヌは天からの声を聞きます。

≪Audivi（O divi と彼女は書いた）vocem de caelo dicentem mihi …≫

≪司祭に，この光栄の十字架をこの場所に建て，その下に至聖所を建てるように言いなさい。全ての人々はここに罪を悔いに来て，平安と喜びとを見いだすであろう。≫

（ラテン語の訳は，「私は　私に話しかける天の声を聞いた。」）

4 回 目 の 御 出 現

1972 年１２月１９日　火曜日　午前４時３５分

いつものように，たいへん優しい声が聞こえ，４度目の十字架を見ました。

≪あなたは，この十字架を　あと　３回見るであろう。≫

5 回 目 の 御 出 現

1972 年１２月２０日　水曜日　午前４時３５分

第５回目の十字架の幻を見，たいへん優しい声が耳元のようなところから，こう聞こえました。

≪この場所に建所に建てられる光栄の十字架は，イエルサレムと

張り合うほどであろうと，司祭に言いなさい。≫

6 回 目 の 御 出 現

1972 年１２月２１日　木曜日　午前４時３５分

６回目の幻も，いつもの場所に，いつもの時刻に，いつものように現れます。

耳元であるかのような声がこう言います。

≪司教に，この司祭は彼にまかされた任務を果たさないうちに教区を去ってはならないと，どうか言ってくれませんか。≫

マドレーヌは，その十字架を１５分からから１８分ぐらい見つめて，こう言いました。

「この素晴しい光は，見ても目がいたくなりません。これは霊魂しかまぶしいと感じさせないんです。」

次に彼女は，こう聞きました。

≪3人見つけて，いっしょにロザリオを唱えて下さい。ここ，ドジュレの境界のところに，光栄の十字架が建てられるために。≫

（付記：この日以来，修道女B.と修道女M.とは，その司祭といっしょにロザリオを唱えています。彼らは，御出現の事情を知らされたのです。）

7 回 目 の 御 出 現

1972 年１２月２７日　水曜日の夕方　7時

マドレーヌは，主任司祭といっしょに教区の教会の香部屋から出て，光かがやく十字架が出現するのを見ます。

いつもより，たいそう小さく，いつもより天の高いところに現れたのです。

数秒後，その十字架の足元に卵形の雲が現れたかと思うと，またたく間に十字架は消え，かわりにその雲の上に人影が立っています。

「私は，いままでに一度だってこんなに美しいものを見たことがありません。その方は頭をかしげて両手を私を招いているかのように，私の方にのばしていました。」
彼女は，こう聞きます。

≪恐れないように。私はナザレトのイエズス，蘇った人の子である。次のようにくりかえして下さい。≪O sorte nupta prospera Magdalena!≫ ≪Annuntiate virtutes ejus qui vos de tenebris vocavit in admirabile Lumen Suum.≫

マドレーヌはこう書いています。

「このすばらしいものを，もうすこし，見とれていることができましたが，一挙に全部が消えてしまいました。」
更に

「時間が止まるようにと熱心に望みました。…その時，私だけがイエズスを見ることができたとは限らなかったかもしれません。この１２月２７日の晩，全人類がこの美しさを見ることが出来たのかも知れません。全ての人々は，私と全く同じ願いをいだいたかも知れません。彼を永遠の方として，ずっといつまでもうっとりと見とれていたいと。」

「イエズス様の両眼は，愛と，優しさと，そして同時に悲しみでいっぱいです。イエズス様の声は，くらべることができないほど優しい…。全ての人はイエズス様が雲に乗ってくるのを，そう遠くないある日に見るでしょう。その日には，地の表は，まばゆくて，目がくらんでしまう程でありましょう。今は，意気盛んに頭を上げる時です。今は，まだあなた方も救われることができる。私たちは皆，天主において１つの霊であります。かたじけなくも，私を訪れて下さったイエズス，…彼は，今日もあなたとともにいらっしゃいます。しかし，私たちの肉体が彼を妨げ，更に霊的な

ものを見えなくさせているのです。

（ラテン語の訳は，「ああ，マドレーヌよ，めぐまれた天命によって妻とされたものよ！深い闇から彼のすばらしい光へとあなたを呼んだ，彼の不思議を告げ知らせよ。」）

付記：マドレーヌは結婚式の為に教会の装飾の花をそなえつけていたのです。これは，修道女たちがいなかったために彼女にまかされた仕事で，本当は，その前日にしておくべきでしたが，彼女にロルセ神父様がどこに花びんや装飾に必要なものがあるかということを正確に言う時間がなかったので，できなかったのです。

8 回 目 の 御 出 現

1973 年 6 月 1 2 日　水曜日　午後 7 時　聖堂で

マドレーヌは，例の修道女たちと司祭といっしょにロザリオを唱え終りました。彼女は顔に風が当たるのを感じ，隙間風かとも思いましたが，不思議に思って，司祭に，彼も同じように風を感じたかを尋ねてみました。彼が感じないと答えたあと，聖ひつの場所に「美しさにかがやく」光があらわれたのです。

イエズスが彼女を抱擁するかのように手を差しのべてあらわれました。

≪どうかここまで来て下さい≫

（マドレーヌはイエズスのそばに行く）

≪次のことばを大きな声でいって下さい。≫

（イエズスは一言一言ゆっくり述べました。）

≪私は始めであり終りであり，生けるものである。そして，あなた方に与えられた全てである。私は，愛であり，平和であり，喜びであり，復活であり，そして生命である。愛と隣人とのためにここにいる人々に接吻をしなさい。≫

どうか，これをくりかえし言って下さい。

≪Attendite, quod in aure auditis, praedicate

super tecta. per te Magdalena civitas Dozulea decorabitur per Sanctam Crucem et aedificat Sanctuarium Domino in monte ejus. Terribilis est locus iste.

地面に3回，罪深い行いの償いとして接吻しなさい≫

イエズスはたいそう悲しそうでした。イエズスはじっと目の前の例の3人をおながめになって，こういいました。

≪あなたといっしょにロザリオをとなえる人々に次のように，大きな声で言いなさい。≫(つまり，2人のシスターと，司祭です）

≪急いで，あなたがたが私の名において見聞きしたことを，世に知らせなさい。司教には，私の掟を知らせるようにと命令を出しなさい。それは，すでにマドレーヌが6回見た場所に正確に光栄の十字架と和解の至聖所が建てられるためである。そして，全ての人々はそこに行列をつくって来なさい。≫

次にイエズスは御腕をあげて，両手のひらをマドレーヌの方に向けました。まなざしは，はるかかなたを見ているようでありました。そして，こう言いました。

≪この十字架が地上に建てられたあかつきには，私は全てを自分の元に引きよせるであろう。≫

つぎに，彼は，腕と手とをマドレーヌを抱擁するかのようにもどして，彼女にこう言いました。

≪どうか毎月の初金にはここに来てください。私は，光栄の十字架の建立まであなたを訪れるであろう。≫

マドレーヌは一瞬イエズスを礼拝しますが，イエズスは，すこし空にういて消えてしまいました。

ラテン語の訳は，気をつけなさい。闇で聞くことを屋根の上で叫びなさい。マドレーヌ，あなたを通じて，ドジュレの町は聖なる十字架によって飾られるでしょう。そして，ドジュレはその山の上に，主への至聖所を建てるであろう。この地はなんと恐るべきであろう。

9 回 目 の 御 出 現

1973年7月6日　金曜日　午後7時5分

聖堂でイエズスは，聖櫃のところに，両手をマドレーヌを抱くようにさしのべてあらわれます。イエズスは，マドレーヌに長い間ほほえみかけます。とても優しい笑顔で，素晴しい好意あるまなざしです。イエズスは，右手をマドレーヌの方に挙げ，もう一方を御自分の胸にあてておっしゃいます。
≪どうか，これから言うことをくりかえし言って下さい。

Misit Dominus Manum Suam et dixit mihi. ≪Spiritus Domini docebit vos quaecumque dixero vobis. ≫

司教のところへ，私があなたに指示したことばをすべて言いに行きなさい。主の碑女は，自分の知らないことばをきっと話すであろう。≫

「しかし，主よ，私はもうそれを覚えていません。」マドレーヌは言います。

≪私の言葉を記憶しなさい。あなたは，私の名において証言するであろうが，言わねばならないことを覚えようと練習する必要はない。なぜなら，私があなたと共にいるのであるから。≫

そうして，イエズスは消えます。

ラテン語の訳は，≪主は，手を広げて私に「主の霊が，私があなたに言うことをすべて，あなたに教えてくださるでしょう」と言った。≫

1973年　8月の初金

イエズスは，現れませんでした。
マドレーヌは，聖堂から泣きながらはなれ，ねむることができ

ません。彼女は，イエズスが要求なさったこと，つまり司教様のところへ行くことをしなかったということを考えました。

マドレーヌは，数日後，ためらいつつ，心配しながら司祭とB修道女といっしょに司教館へ行きます。

聖霊は即座に全てを彼女に思い出させました。司教様は，「もし，それが天主からのものならば，長く続くでしょう。」と言いました。

マドレーヌは，イエズスが頼んだことをやってしまって，とても幸福で，ドジュレへの帰り道，車の中には，大きなよろこびでいっぱいでした。

「聖霊さま，あなたなしには何も存在しませんし，あなたを所有すると，全てはよろこびであり，全ては愛であり，全てが可能です。」

10 回 目 の 御 出 現

1973 年 9 月 7 日　金曜日　午前 7 時

聖堂で，御聖体のところに光があらわれ，つづいて，ほほえんでいる，とても優しいほほえみのイエズスがあらわれます。

≪膝を折って敬意を表しなさい。喜びなさい。ナザレトのイエズス，よみがえった人の子は，そこ，私の前にいらっしゃり，光につつまれている。御両手と御顔は太陽にように輝いている。御まなざしは愛であり，優しさである。初めであり終りであり生けるものが，その証人であるあなたがたすべてに，次のように言うものである。

喜びなさい，主において絶えず喜びなさい。あなた方のよろこびがすべての人々に知られますように。今，ここにいる主の碑女は，自分の見つけた光のうちによろこびにあふれているとよろこ

びなさい。…謙遜で，忍耐づよく，慈悲深くありなさい。…

（まなざしはもっと真剣になり）

罪のつぐないのため，地面に３回接吻しなさい。

イエズスは悲しそうなまなざしでした。イエズスは，世界をみているかのようにたいそう悲しげな目つきで，いつも聖堂の中の人々をごらんになりました。

マドレーヌが，イエズスに理由を尋ねるとこうお答えになりました。

≪私は世の人々の信仰のなさ，私の父を愛さないすべての人々のせいで悲しいのです。≫

（たいそうゆっくりと）

≪これからということを大きな声でおっしゃいなさい：

≪みんな行列をつくって，主の碑女が光栄の十字架を見た正確な場所に行き，この謙遜な祈りを毎日唱え，ロザリオを一連（天にまします　１回，めでたし　10回）そのあとつけ加えなさい。

≪あなたと一緒にロザリオを唱える人々のように，すっかり，唱えてしまいなさい。≫

（ゆっくり，真剣に，しっかりと指示して）

ー　ああ天主，御身をぼうとくせる人々をあわれみ，彼らを赦したまえ。彼らは，そのなすところを知らざるなり。

ー　ああ天主，この世のつまづきをあわれみ給え。彼らを悪魔の霊より解き放ちたまえ。

ー　ああ天主，御身を遠ざかる人々をあわれみたまえ。聖体を望む心を彼らにあたえたまえ。

ー　ああ天主，光栄の十字架の足元に痛悔に来たる人々をあわれみたまえ。願わくは，彼らがそこで我らの救主なる天主のうちに平和とよろこびとを見い出すように。

ー　ああ天主，御国の来たらんことを。されど霊魂は救い給え。時はなおあり。かの時は近づけばなり。見よ我は来る。アーメン。主イエズス，来たりたまえ。≫

マドレーヌは涙を流していました。イエズスは彼女がロザリオを唱える間，ずっと悲しそうに彼女を見つめていました。ロザリ

オののち，こうおっしゃいました。

≪主よ，御身の無限なる慈悲の宝を，あまねく世の人々に施し給え。≫

どうぞ，いまから言うことをくりかえして下さい。

≪Vos amici Mei estis. si feceritis quae Ego praecipio vobis…
あなたが，私の名において証言するごとに，どうぞこれをくりかえし言って下さい。≫

「主よ，私は御旨をはたします。」マドレーヌは言いました。
ラテン語の訳：もし私があなた方に命ずることをするならば，あなた方は私の友です。

11 回 目 の 御 出 現

1973 年１０月５日　金曜日　午後７時

聖堂で，イエズスは御聖体の位置をとりました。祭壇も，聖体顕示台ももうありません。主は，マドレーヌのすぐ近くに，軽く上にあがって，御足は平らな岩の上，いくつかのじゃり石のとなりにおのせになって，あらわれました。御右足はふみ出していて，軽くくるぶしのところまであらわになっています。御左足は，衣服で大部分がかくれています。御服は，編みひもでしばってあり，襟空きは丸くて，ギャザーがあって，襟ぐりはゆったりとしており，袖は，アルバのようにゆったりとしています。服は，１つの布でできています。御髪は両肩にかかる程の長さです。御両手は，御顔と同じく，光りかがやいており，御顔は驚嘆すべきであり，その他のところは真白です。御まなざしは愛であり，親切であり，太陽のように非常にかがやいています。

(「私がアンダラインをしたこの段落は，イエズスから受けたも

のです。」と，マドレーヌは書いています。）

イエズスはマドレーヌにほほえみ，両手を招くようにひろげました。マドレーヌは，ひざを折って敬意を示しました。次に，ひざまづいて十字架のしるしをしました。

（「私は，これを機械的にイエズスが私に頼みもしなかったけれどしました。きっとこれは，イエズスが私にそうさせたのでしょう。私は，そうしなければなりませんでした。」マドレーヌは説明しています。）

イエズスは，しばらく何もお話しにならないでそのままでした。マドレーヌは，このすばらしい奇跡を感嘆して見とれていました。イエズスは，こうおっしゃいました。

≪ここにいる人たちに，私がロザリオ一連するまえにとなえるよう，教えた祈りをあなたと一緒にとなえるように言いなさい。

- **ああ天主，御身をぼうとくせる人々をあわれみ，彼らを赦したまえ。彼らはそのなすところを知らざるなり。**
- **ああ天主，この世のつまづきをあわれみたまえ。彼らを悪魔の霊より解き放ちたまえ。**
- **ああ天主，御身を遠ざかる人々をあわれみたまえ。**
  聖体を望む心を，彼らにあたえたまえ。
  聖父（おんちち）の御旨をはたし，このパンを食べる人々はこの光のうちに，永遠に生きるであろう。
- **ああ天主，光栄の十字架の足元に痛悔に来たる人々をあわれみたまえ。願わくは彼らがそこで，我らが救主なる天主のうちに，平和とよろこびを見い出すように。**
- **ああ天主，御国の来たらんことを。されど霊魂は救いたまえ。時はなおあり。…かの時は近づけり。見よ我は来る。…アーメン。主，イエズス来たりたまえ。**

イエズスはとても優しくロザリオを一連マドレーヌと一緒に唱えました。マドレーヌは≪めでたし…≫を１回１回待っていました。そして彼女はこう書いています。

「イエズスといっしょにロザリオを唱えるのはあまりにも感動的で，私は一生のうちこれほどゆっくり落ちついて唱えたことはありませんでした。」

イエズスは，こう言います。

≪主よ，御身の無限なる慈悲の宝をあまねく世の人々に施したまえ≫

マドレーヌはこう書きとめています。

「私はイエズスのすばらしい臨在にすっかり夢中になってしまい，この祈りをくりかえして言わなかったと思います。私は何も言わず，何も願わず，限りなくイエズスを感嘆して見ていました。更に，願うべきことは何もありませんし，私は何も聞かず，身動きもしませんでした。イエズスがそこにいるとき，私は地上にはいませんでした。私は，自分をとりかこむものをもはや見も考えもしませんでした。私が強く感じたことを，どんな単語でも説明できません。かくも透明なこの光の中で，宇宙の，あるいは永遠の深遠まで見晴すことができるかのように思われました。

疑っている全ての人々に，私はこう断言することができます。見ることのできる世界の外に，もう1つ別の世界が本当にあって，この見ることのできない世界は，もっとすばらしいところです』

イエズスは，言い足しました。

≪大きな声でこういいなさい。≪光栄の十字架は，

（イエズスはここで，そこに居あわせた人が，ぐるりとごらん

ラオートビュト山に建てられ，その垂直の次元でイエルサレムの町に匹敵しなければならない。その両腕は，東西方向にむけてすえつけられねばならない。それは，光沢のあるものでなければならない。≫

（非常に重要そうに）

≪人の子の印とはそれである。

光栄の十字架からその右腕の方に100メートルいった場所を掘りなさい。

泉がわくであろう。あなたがたは全てそこで，潔めのしるしとして自分を洗いに来るであろう。…≫

（マドレーヌの方に体を傾けて，大きな声で言うように明確には言わずに）

≪常によろこびのうちにいなさい。この世代におこる（世界）全体の大異変を嘆かないように。何故ならこのことすべては起こらなければならないのだから。しかし，空に人の子の印が現われるのを見なさい。今は，諸国の時が完うされねばならない。全ての人々はその胸を打つであろう。全世界が福音宣教されたのち，私は，光栄のうちにふたたび来るであろう。≫

イエズスは，マドレーヌを見て，ほほえみ，消えました。

12 回 目 の 出 現

1973 年１１月２日　金曜日　午後７時

聖堂で，イエズスは両手をひろげて現われ，両腕を十字架のように広げました。御頭は，あたかもこれからはりつけられるかのように軽く右にかしいでいました。御傷跡はなかったばかりか，私は全く傷跡を見ませんでした。

イエズスは，こうおっしゃいました。

≪ドジュレは今後は祝福され，聖化された町なのです。あなた方はキリストに反する悪の最後の力の時を生きています。サタンは，監獄から解き放たれて地のすべてのおもてにとりついています。≫

イエズスは，いつも私にたいそうゆっくりとお話しになります。この日も，イエズスの御声は，それはそれは重々しく，私は，そのようなイエズスを見るのがとてもかなしゅうございました。次に，私にこうおっしゃいました。

≪ゴグとマゴグ，その数は莫大。何が起ころうとも心配しては

いけません。全ての人は，世々にいたる火に投げ入れられるだろう。至高の天主にのみひきつけられる人は，さいわいなるかな。≫

次にイエズスは両腕を下げ，いつもの姿勢をおとりになりましこ。つまり，いつものように両手を私の方にさしのべて，こうおっしゃいました。

≪このメッセージは，あなたのためのものです。

至高の天主にのみひきつけられた人はさいわいなるかな。なぜなら，私の父は，善以外の何ものでもないからです。天主は最悪の罪人であっても彼の人生の最後の瞬間に彼を赦すのです。罪が大きければ大きい程,私の哀れみも大きい,と罪を悔いて死なんばかりの人々に言いなさい。人間の魂が自分の体を離れたその瞬間にですら，その魂はこのまばゆい光の中にあるのです。彼らに言いなさい ー イエズスの言葉を。≫

イエズスは，長い間マドレーヌにほほえみ，彼女に司教様に関する重大なメッセージを残し，彼女に彼女自身に関することを伝えました。そしてイエズスは消えます。

1973 年１２月７日　金曜日

イエズスは来ませんでした。

マドレーヌは，長い間待ちましたが，午後７時４５分に聖堂を立ち去ります。しかし，彼女にはイエズスがいつもそこすなわち毎日の私たちの生活のうちに，ましますことがわかっていました。

「ああイエズスよ，もしもあなたが私が愛していることを知っていてくれたなら！　でも彼はちゃんと知っている。」

13 回 目 の 御 出 現

1974 年１月４日　初金　午後４時１５分

マドレーヌは，修道女たちの家にアイロンがけをやりに午後2時ごろ来たのですが，聖堂でイエズスを訪問するために外に出ました。一度聖堂から出ますが，マドレーヌは「あたかも何かが彼女を導いたかのように」3時ごろ戻ります。彼女は，自分がその場に釘づけにされ，そこに限りなくとどまるようにしむけられていると感じます。彼女は，4時15分の時報を聞きます。

彼女は，ロザリオの最後の一連をはじめようとするところでした。と突然，彼女は暗闇の中におちいり，自分の心臓がドキドキ打つのがわかりました。その時，M修道女と一緒にいた司祭に叫びます。

「私はどうなってしまったのですか？　全然見えません…こわい…　何時ですか。家に帰りたい。」

彼女は，司祭が近ずいてくるのがわかりました。司祭は，のちにこう語っています。

「私が彼女に近ずくと，彼女は，実際，まるっきりの盲人のような素振りで，夜，全く道に迷ったようでした。両眼はどんよりとし，顔はやつれ，途方にくれ，おびえていました。私は，これは，不慮の試練というよりは，神秘的な現象の最初の事件だと考えながら，彼女を安心させようと試みました。『ちょっと待っていなさい，これはすぐに過ぎ去るから。』私は，M修道女にB修道女を来させるように頼み，彼女はすぐにやってきました。」

マドレーヌは，それにもかかわらず安心できませんでした。彼女はずっと後に，こう書いています。

「私は自分自身にこう言い聞かせていました。私のところにいるのはイエズスではないということは誰でもわかる。と。私は，このままどうなってしまうのか自問してみました。家族や子供たちのことを考え，なんと悲しかったことでしょう。イエズスは，ある日御訪問のあとで，私に，罪を犯した人々のために私は苦しまねばならないとはよくおっしゃって下さいましたが，私の目が見えなくなるとはおっしゃいませんでした。イエズスは，私の体

におこるであろうこと，そして特に，私が霊的に多く苦しむであろうということは，私におっしゃっていました……。もし私がなにかを言ったとしたら，それは恐しかったからです。…

「このことがイエズスからのものとはちっとも考えていませんでした。それは，いつもの時間ではありませんでしたから。というのも，以前は，イエズスを見るのは夕方の７時でしたから。

そして，この恐しいもだえのうちに，目と魂との全くの暗黒のうちに，いつもの喜びが私をとらえました。」

「濁っていた彼女の両眼は，その輝きをとりもどし，彼女の悲しみは大きな喜びに，筆舌に尽くせない平安に変わりました。」と司祭はいいます。

彼女は，こう書いています。

「それは，死の床に苦しむ人と全く同じ状態だったと思います。その人の魂が肉体を離れるとき，彼はもはや苦しみません。そして，突然，その魂はこの優しさの中に，この霊的光のうちにあり，イエズスとともに変容にあずかるのです。

次に，光がマドレーヌに，いつものように御聖体のところにあらわれます。「一段と美しく，より光をはなち，いつもよりずっと透明です。…」

マドレーヌは，聖堂の一番奥まったところで考えます。

「私はイエズスの手の中にある。私たちはみんなイエズスの掌の内だ。イエズスは，支配者であって御自分が欲っしたもうことを私たちを使ってなさる。イエズスが私たちに与える全ての恩寵をイエズスに感謝しなければなりません。もし，わたしたちの目が見えるなら，もし，私たちの耳が聞こえるなら，もし，わたしたちが歩けるなら，もし，私たちが健康なら，もしわたしたちが幸福なら，それはみんなイエズスのおかげ，イエズスだけのおかげです。イエズスは，そういったものをすべてほんの一瞬のうちに，わたしたちから取り除くことができるのです。」

そして，イエズスは右手を御心の上において，左腕を体にそって垂れて，現われました。マドレーヌにほほえんで，いいました。
≪どうして怖れたのですか。なぜ疑ったのですか。私はここにいます。≫

マドレーヌは答えて，
「主よ，私はこわかったのです。盲目になってしまったと叫んでしまいました。」
イエズスは，言います。
≪彼らに言いなさい。この地上の全ての人間は，そのように暗黒の中にいる，と。≫
そして，大きな声で言うようにとは詳しく言わずに，
≪信仰が足りないことを痛悔して地面に３度接吻しなさい。≫
（マドレーヌはする。）

次にイエズスは，ゆっくりとしたしぐさで御心から右手をとり，マドレーヌにさし出して，もっと近づくように手まねきをしながら，こう言いました。
≪ここまで来て，私にあいさつしなさい。≫

マドレーヌは，イエズスのすぐ近くに行ってひざまづき，イエズスに教えられたとおりにあいさつをします。

イエズスは，御心に手をあてて，マドレーヌに，言います。
≪これをくりかえしてください。
Ecce Dominus Noster cum virtute veniet et illuminabit oculos servorum suorum. Laetamini , laetamini in Domino, laetamini cum Magdalena. Paratum cor ejus:
≪Speravi in Domino, ut se simplicitas prodit amabilis.≫

そして，マドレーヌに大きい声で言えとは指示せずに，
≪毎回　御聖体拝領が終ったのちに，自分の座席にもどるたびに，あなたの左の手を心臓の上にのせて，右手をそれの上に交差

させなさい。≫

イエズスは，マドレーヌに説明したこの動作をしてみせました。イエズスは，マドレーヌにしばらくほほえんで，消えました。

ラテン語の訳は：我らが主は力強くおいでになり，主の召使らの眼を輝かさんことを見よ。喜べ，主においてよろこべ，マドレーヌと共によろこべ。彼女の心は準備ができている。≪私は，主において期待した。愛らしき単純さが映し出さるために。≫

1974 年　2月の初金

イエズスは，現れませんでした。

14 回 目 の 御 出 現

1974 年3月1日　午後3時半から3時4 0分まで

聖堂には，司祭と3人の修道女と4名の婦人とがいます。
「ほら，光が」と，マドレーヌはいいます。

イエズスは，いつものように同じ場所に，マドレーヌを出迎えるかのように現われました。イエズスはマドレーヌに少しほほえみ，御眼を天に上げ，重々しく，遠くを見やるように，いいます。
≪どうか，これをくりかえしてください。
イエズスは，両腕を十字架状にのばし，すこし大きな声で，たいそう優しくいいます。マドレーヌは，一文一文くりかえします。
≪Ecce cujus imperti Nomen est in aeternum. Quae videt Me, videt et Patrem Meum. Magdalena/ ≫
≪Annuntiate virtutes ejus qui vos de tenebris vocavit in admirabile Lumen Suum. Nolite timere, Deum benedicite, et cantate Illi.≫
イエズスはつづけて，

≪私は世の光，闇の中に輝く光であり，闇はそれを少しも理解しなかった。≫

≪償い，償い，償い，この世の信仰の無さのため，償いとして地面に三度接吻しなさい。≫

次にイエズスは，いつもの姿勢にもどって，

≪今日，ナザレトのイエズス，復活した人の子は私をこれで八度訪れてくれます。　イエズスの両手，御顔は太陽のように光かがやいています。御服は，まばゆいほどの白さです。御まなざしは，愛らしく，優しいものです。私があなた方を愛したように，あなた方の隣人を愛しなさい。あなた方のまなざしが，あなた方のうちの誰一人に対しても，愛深く，優しいものでありますように。そばにいる一人に，愛と愛徳とのために接吻しなさい。≫

マドレーヌは，自分がそこで最初に目にとめた人に接吻しました。それは，M修道女でした。

次にイエズスは，こうつけ加えます。

≪このしぐさは，全世界に共通の愛と仲なおりとのしるしである。『マリアよ，よろこべ』と，大天使ガブリエルは人の子の懐胎のときにいった。≫

たいへんおもおもしく，

≪実に，今日，私もそれと全く同じことをいおう。　喜びなさい，人の子が光栄のうちに再び来る日は近いのだから。　よろこびなさい，よろこびなさい，主において，絶えず。あなた方のよろこびが，あなた方が聞いたことばによって，私の名によって，全ての人々に知られますように。≫

しばらくして，

≪あなた方の一人一人が，自分の心の静けさのうちに自分の望む聖寵を天主に求めなさい。今日もまた，あなた方にそれは与えられるであろう。≫

マドレーヌは，少しの間黙っていました。つづいて彼女は，イエズスが彼女に語られるたいへん重大な御言葉を聞いたのです。マドレーヌはそれをくりかえし言うことは出来ませんでした。そ

れほど重大だったのです。彼女は，聖堂を出るときに司祭に打ち明けました。

ずっと同じ姿勢で，主は言葉をつづけます。

≪教会に，全世界に平和のメッセージを，一新させるように言いなさい。なぜなら，今は，重大な時ですから。サタンは世界を操っています。サタンは霊魂を誘惑し，人々によって数分のうちに人類を破滅することができるようにしています。もし，人類がそれに抵抗しないのならば，私は，勝手にやらせておくであろう。そしてそれは，ノエの大洪水以来かってなかったほどの破局につながるであろう。それは，今世紀末の前におこります。光栄の十字架の足元に悔い改めにくるものは全て救われるであろう。サタンは滅ぼされ，平和とよろこび以外のなにものも残らないであろう。≫

そして，イエズスは消えます。

ラテン語の訳は：「永遠の支配力をもつ名を持つ人を見よ。私を見る者は，私の父をも見る。マドレーヌよ！あなたを暗闇からそのあがむべき光へと呼んだお方の驚くべき不思議を公けにしなさい。恐れてはいけません。主を賛美し，主のために歌いなさい。」

15 回 目 の 御 出 現

1974 年4月5日　金曜日　午後3時40分

聖堂で，光の輪が聖体顕示台のところにでき，つづいてイエズスが，マドレーヌを迎えるように両手をのばして現れます。彼女は，＜ほんとうに素晴しい＞とイエズスを感嘆して見ています。

イエズスは彼女にほほえみ，彼女は，イエズスに大きな声でたずねます。

「もし，あなたがキリストなら，どうして，私はあなたの傷跡が見えないのでしょうか？」

司祭が，彼女にこの質問をするように命じたのでした。

イエズスは，なおも彼女にほほえみました。

「私は，このときなんと説明しようもないほどの優しさを感じたことでしょう。私はもはや，地上にいると感じませんでした。」と彼女は書いています。

イエズスは，そのとき，右手を挙げ，彼女に言います。

≪あなたがたに平安あれ≫

≪これを大きな声でいいなさい。

つづいてイエズスは，いつもの姿勢をとりながら，もう笑わずに，こう言います。

≪イエズスは，おたずねになる。この動揺は何故ですか？何故あなた方のうちにこの考えがうかんだのですか？あなたがた，私があなた方に頼むことを実現させる任務のある司祭たちよ，主の碑女が，自分の知らないことばを口にするのを待つよりも，山から水が湧き出すのを見て奇跡をさけぶ方がずっと，たやすいのではありませんか？信仰の薄い人よ，私の約束を思い出しなさい。≫

イエズスの声は厳しいものでした。

≪私の名によって来る人々は，自分の知らない言葉を話すであろう。≫

少しの沈黙ののち，くりかえすようには言わないで，

≪何も疑うことなく，立ち上がって私の手にふれなさい。≫

マドレーヌは立ち上がり，イエズスは彼女に自分の左手を，つづいて右手をさし出しました。

彼女は書いています。

「私は，そんな訳で，自分の手でイエズスの２つの手をとったのです。」

（そこに居合わせた人々は，マドレーヌが，右に，続いて左に，聖体顕示台のどちらの側にも，あたかもキリストの両手をとっているかのように両手を差しのべているのを見ました。）

イエズスは，マドレーヌに，

≪もう疑いを持たないように。霊魂には，手もないし，肉体もないのだから。≫

マドレーヌは，元の場所にひざまづきました。
イエズスは，マドレーヌに言います。

≪彼らに，こう言いなさい。（マドレーヌは大きな声でくり返しました。） もう疑いを抱くのはやめなさい。私が今日，七度目に見るのは，復活されたイエズスその方です。私はイエズスの御手に触れたばかりです。≫

次に，池をどこに掘ったらいいか知らない人々の望みに答えて，マドレーヌは大きな声で尋ねます。

「主よ，水が出るようにどこを掘るべきですか？」

イエズスは，彼女に答えました。

≪ラ オート ビュット＊の，ドジュレの境界線ぎりぎりに建てられた光栄の十字架は，くだものの木，罪の木のあるところに正確に建てられる，というのは，光栄の十字架は全ての罪から立ち直るであろうから。その両腕は，東西にむかって伸びなければならない。各々の腕は 123メートルであり，その高さは，その6倍でなければならない。100メートル測られるのは，この123メートル 十字架が占める場所からでなければならない。次に縦2メートル，横1.5メートル，深さ1メートルの池を掘りなさい。囲いもつくりなさい。水が湧き出るであろう。≫

イエズスは更につけ加えます。

≪もしあなたの心が冷淡ならば，水は少ししか出ず，わずかな人しか救われないでしょう。≫

更に，

≪Vos amici Mei estis si feceritis quae Ego praecipio vobis, dixit Dominus.≫

イエズスは加えて，

≪左手をあなたの心臓の上にのせて，その上に右手を重ねなさい。≫

イエズスは見えなくなり，マドレーヌも元の場所に戻りました。

（＊訳注：ラ オート ビュットとは，小高い丘という意味）

彼女は，自分のよろこびを叫びたく，よろこびの涙を流しながら聖堂を出るときに司祭とある一人の人にこう言います。

「イエズスは本当に生きている。肉体のうちに復活されたのです。私はイエズスの両手にふれたのです。それは，肉体の手でした。私たちのと同じです。温かい手です。…　私は歌をうたいたかった…。」

マドレーヌの望みによって，人々はマグニフィカトを歌います。

「私は，何も言ってはいけないと命令されています。司祭と司教様にこそ従わねばならないのです。私を抑えていたのはそのことなのです。私は，全て疑っている人々に復活したイエズスのよろこびを与えるために，皆に向って，私のよろこびを叫びたかったのです。」

ラテン語の訳は：「あなたがたは私の友です。もし，あなた方が私の命ずることをするのならばと，主はおおせられる。」

1974 年 4 月 1 2 日　聖金曜日

午後，B 修道女と牧草地の地主さんとの間で承諾をとってのち，3 人が池を堀ります。寒かったので，堀っている庭の池の底で，B 修道女は，ボランテアの人々のためにアルコールこんろの上でコーヒーを温めていました。……

16 回 目 の 御 出 現

1974 年 5 月 3 日　金曜日　午後 5 時 1 0 分から 5 時 2 5 分

イエズスは，両手をマドレーヌの方にのばして現われます。イエズスは彼女にほほえみ，彼女は非常にしあわせです。彼女は，際限なくイエズスの現存のうちにとどまっていました。

イエズス

大きな声で言いなさい。

≪司祭は誤っていない。傾いたこの木は，罪のかたどりである。果実があらわれる前にそれを引き抜きなさい。そして，急いでその場所に光栄の十字架を建てなさい。なぜなら，光栄の十字架は全ての罪から立ち直るであろうから。≫

マドレーヌ

「すぐ後で，イエズスは，両手を重ねて自分の胸の上に置きました。私を悲しげに見つめられました。私は２粒の涙が御眼から流れるのを見ました。私はその時，泣いてしまいました。イエズスは，それほど悲しかったのです。」

イエズス

≪全人類に災いあれ。もしその池に着手ののち正確に５０日以内に水が出ないとすれば。何故なら，サタンは，大部分の人々の潔めを妨げるからである。私の約束を思い出しなさい。私は，信仰の不足故に，（サタンに）やりたいようにさせておくであろう。≫

≪教会に，メッセージを全世界に伝えるように，そして，急いで指示された場所に光栄の十字架を建て，その足元に至聖所をつくるように言いなさい。全ての人々は，そこに悔い改めに来て，そこで平安とよろこびを見い出すであろう。光栄の十字架，あるいは人の子の印は，復活されたイエズスの光栄のうちの真近なる再臨の前兆である。この十字架が地上に建てられるであろうとき，私は全てのものを私のもとに呼び寄せるであろう。≫

≪この祝福された聖なる町のうちから１１人さがし出しなさい。彼らは，私の弟子である。彼らは，一軒一軒，私の名によって光栄の十字架の建立のために喜捨を仰ぐであろう。以下が一人一人の弟子が尊重すべき掟である。

- 光栄の十字架の建立まで働きなさい。
- 謙遜で，忍耐強く，親切でありなさい。人々があなたのうちに，私の弟子ということを認めるために。
- それぞれ個人的利益を求めず，光栄の十字架を建立させる

ことだけに関心を持つように。なぜなら，そこに悔い改めにくる人は全て救われるだろうから。≫

イエズスは繰り返して言うようには言わずに，こう言います。≪司祭に，私はマドレーヌに１７回目として訪れて下さったと言いなさい。何故なら，光栄の十字架は，復活されたイエズスでもあるのだから。≫

そして，イエズスは見えなくなります。

注：司祭とマドレーヌとは一緒にラオートビュット山に，十字架の位置を決めようと登ってみましたが，うまくいきませんでした。次に彼らは，空に向かって真すぐに立った電燈をいくつか使います。マドレーヌが十字架を6回見た窓に残り，オートビュット山に登っている司祭に指示しました。司祭は，堀で囲まれている円い小さなオピドムに達しました。それは，正確にもドジュレの町境にあるものです。主が十字架を樹てよとお頼みになった正確な場所は，位置づけられるべくあったのです。司祭は，そこが確かに傾いたリンゴの木のあった場所に違いないのだろうと考えていましたが，それは確かではありませんでしたのでその夜は寝れませんでした。

イエズスはここで，彼女の感覚の正確さを確認なさいます。

リンゴの木の幹に綱をつけて223メートル測りながら池が堀られました。この池に水が出るかどうかが，きわめて重要な関心事となりました。そのために十字架の場所に行くことすらなおざりになりました。水は出ませんでしたので，聖霊降臨の主日の後にノベナをします。

ある夜，マドレーヌとM修道女とは池の中に水が現れた夢を見，そのことを次の朝，司祭に報告します。すると司祭はこう答えました。「何ていい夢を見たんでしょう。」

司祭は，前日の晩に，池の中には水がない事を確認してありました。それでもマドレーヌはラオートビュット山に登り，そこに確かに水があるのを確かめます。その水はしかも３０センチほどの高さもありました。測候所に問い合わせたところ，昨夜は雨が降らなかったうえに，雨がそれほどの高さまで水をもたらすことはあり得ない，とのことでした。

17 回目の御出現

1974年5月31日　金曜日　9時45分〜10時5分

その日は初金ではありませんでしたので，マドレーヌはイエズスの訪問を待ってはいませんでした。毎朝彼女は，子供達を学校へ送ったあとイエズスを訪問しに聖堂へ行くことにしています。

御聖体拝領の少し前にB修道女がある一人の病人のために司祭を捜しに来ます。彼は長く留守にするつもりはありませんでした。

突然　御聖ひつの場所に後光が差しました。それは，以前よりもずっと大きく，少し低いところにあらわれました。誰かを待っているように思えました。

マドレーヌはB修道女をさがしに行って，彼女に言います。

「誰かがいるのだけれど，イエズス様ではないわ。」誰かを見ながら，「私が知らない人だわ。」

マドレーヌはこう言い加えます。

「前は，キリストの御姿に自分をすっかり忘れて，回りにあるものはなにも感じなかったのだけれど，私は，確かに聖堂の中にいると感じていました。……私の知らないこの人は，上に小さな十字架のついている旗のようなものを持っていました。十字架は，旗竿と同じぐあいに同じ色調で，黄金のように輝いていました。十字架の下さに，織物でできたようなのぼりがついていて，それには3つの単語が書かれてあり，私はその最初と最後を見たと思いました。≪QUIS… DEUS≫ その旗竿の下の端は槍か（トランプの）スペードのような形をして，少しとがっていました。その人の髪は縮れていて，短く，兵隊のようでした。彼の鎧は短くて，右手は旗竿の中頃を持っていました。彼のふくらはぎには革ひもが締めてありました。

私は，その方に尋ねました。「あなたはどなたですか？」

「私はあなたにあいさつします。」といって，彼は私におじぎをしました。

「私は大天使ミカエルです。私をつかわしになったのは天主様

です。あなたは，贖い主の神秘をご覧になり，私があなたに言うとおりに一つ一つ文章をくりかえし言ってください。」

マドレーヌは彼に答えました。

「あなたをお使わしになったのが天主様だというのなら，従います。」

大天使は，彼女に話した時は，そこにずっといました。

≪per Mysterium Sanctae Incarnationis Tuae.≫

彼は消えました。

マドレーヌは，こう言います。

「私は，全て白い服を着た人が膝まづいているのを見ました。私は，それは天使であると思いました。彼は頭に三角形の肩掛けをつけた美しい乙女を見ていました。天使を見て，彼女は会釈し，そのまま頭をかしげ，主が私に教えてくれたのと全く同じ方法で一つずつ手を自分の胸におきました。私はその同じやり方に特に気付きました。そして，そのしぐさは私に強い印象を与えました。その数秒後，全ては消えました。」

次に私は，こう言う大天使を再び見ます。

≪Per Nativitatem Tuam.≫

大天使は消えます。

マドレーヌは，柳の細枝で編んだ揺りかごの内の，あるいは，揺りかごの形をした藁の上にみどり児を見ます。まわりには多くの人々が，長い服を着て，その嬰児を眺め，感嘆しているようです。……次に全ては消えました。

彼女は再び，大天使が同じ場所にいるのを見ますが，彼女は更に，彼は常にそこにいる（しかし，マドレーヌに現われる生き生きした光景の方が重要なので，彼女の目にはうつらない）のだと思います。

彼は彼女に消える前に言います。

≪Per Baptismum et Sanctum Jejunium Tuum.≫

イエズスは，背の高い人と一緒にいますが，背はイエズスの方が高い。彼はある種の袖なしマント，あるいは，短いけばのある毛皮を身にまとっています。私には水が川のように流れるのが見

えます。この人は，お椀の柄を持って川から水をすくい取り，イエズスの御頭に注ぎます。そのすぐ後に，イエズスは上り道を登り，高みに出来ます。そこに腰掛けます。両腕を交差させて，両眼を祈るように天にあげます。そして全ては消えます。

彼女は，また大天使が言うのを見ます。

≪Per Crucem et Passionem Tuam.≫

そして消えます。

イエズスは，上り道の中途を歩きながら，やっとの事でとても重い十字架を右肩に担っています。道の両わきには，愚かな人たちが笑っています。ある者どもはイエズスにむかってなにかを投げるように腕を上げます。イエズスはその十字架の重さに打ちひしがれながらも倒れません。私はそのことに驚いていました。何度も，私は，イエズスが車道に，崩れおちてしまうのだろうと思いました。かわいそうなイエズス。そして像は消えました。

大天使は，もう一度出現し，言います。

≪Per Mortem et Sepulturam Tuam.≫

そして消えます。

マドレーヌは，十字架上のイエズスを見ます。死んでしまったようです。御頭は前にたれ，上半身は裸で，右わきには大きな傷，そしてその御傷の下には一筋の凝固した血液があるようです。3人が十字架の下にたたずんでいます。各々の方向に一人ずつ，悲しんでイエズスの御顔を眺めています。

真中の一人の女性は，ひざまずいて自分の両腕で十字架の根元を抱き締めています。支えにつけられたイエズスの両足に接吻したいかのようです。

マドレーヌの涙が流れます。

マドレーヌは，また大天使が言うのを見ます。

≪Per Sanctam Resurrectionem Tuam.≫

この瞬間に，マドレーヌは，生きているイエズスにもう一度会います。よろこびが彼女の心をとらえます。イエズスは，1972年12月27日の晩の第一回目と全く同じように彼女に現れました。ほほえみながら，両腕を，彼女を迎えるかのように，彼女に

むかってのばしながら。イエスズは彼女に言います。

≪私はナザレトのイエズス，死者のうちより復活した人の子である。≫

≪私の傷を見なさい。≫

イエズスの服には穴などないのだけれど，右手で服をあけて，御脇腹を見せました。マドレーヌは血の流れていない大きな御傷を見ました。御右手の甲には，小さな穴が見えました。彼女に向かって差しのべられている御左手にも同じく手のひらに穴がありました。

つづいてイエズスは言います。

≪近づいて私の脇に触りなさい。≫

マドレーヌは立ち上がり，右手を伸ばし，人指し指と中指とでイエズスの深い傷のふちにふれました。

彼女はいたく感動してこう言います。

「主よ，あなたは私たちのために，何とお苦しみになったのでしょう。」

彼女はイエズスが世のため，世の罪のため，世の忘恩のため，私たち全てのため，あわれな罪人たちのために，かくもお苦しみになったと思うと悲しくなりました。

彼女は再びひざまづき，イエズスはいつもの姿勢をとられました。（両手を彼女にむかって差しのべています。）御衣はふだんのとおりにもどりました。イエズスはおっしゃいます。

≪これを大きな声で言いなさい。≫

イエズスは，彼女がくりかえして言うことが出来るように，一文一文ゆっくり彼女に言いました。

≪イエズスは，あなた方に教えたお願いを全世界に伝えることを求めています。イエズスは，光栄の十字架と至聖所が，この聖年の終りに建築されるよう，求めています。≫

（２５年ごとに聖年があり，1975 年も聖年でした。）

≪何故なら，これが最後の聖年だからです。毎年，マドレーヌが最初に十字架を見た日にそこで，荘厳な祝日が祝われるように。信頼に満ちて，そこに悔い改めに来たものは，全てこの世の生活

において，及び，来世までも救われるでしょう。サタンは彼らにもはや，力を持たないでしょう。

しばらくのちに，重々しい声で，

≪まことに，私はあなた方に言います。私の父はあなた方を救うために，あなた方に，平和とよろこびを与えるために，私を使わしました。私が愛であり，あわれみであることを知りなさい。≫

次に，イエズスはこう付け加えます。

≪これが私のメッセージの最後である。≫

大天使が姿を現わさずに，マドレーヌにつづきの言葉を言うあいだ，イエズスはずっとそこにいました。マドレーヌは，くりかえして言いました。

≪Per Admirabilem Ascensionem Tuam .≫

この時，イエズスは，マドレーヌの上に右手を挙げて，彼女に

≪あなたとあなたに近づく人々全てに平和があるように。≫

と言います。イエズスは手をおろしました。

マドレーヌは，イエズスが本当にやさしく，軽快に姿を示しているのを見ましたが，次に消えます。

マドレーヌは，今度は再び大天使が言うのを見ます。

≪Per Adventum Spiritus Sancti Paracliti .≫

彼は消えずに言います。

≪イエズスはあなたから去ったばかりです。彼のメッセージはおわりましたが，あなたにそれをもう一度見せましょう。≫

そして彼は更にこう言う。（マドレーヌは，大きな声で繰り返しました。）

≪Per cujus imperti Nomen est in aeternum, ab omni malo libera nos Domine.≫

大天使は彼女に，くりかえして言いなさいとは言わずに，こう言いました。

≪つまり，主よ，永遠の支配権をもつ名の方によって全ての悪より救いたまえ，という意味です。≫

大天使は言う。

≪これを大きな声で言いなさい。

天主は司祭たちに，彼らの　仕事を完成させることの遅さと彼らの不信仰を非難しています。天主は世に，マドレーヌを暗闇から彼のすばらしい光のうちにお呼びになったお方の，不思議を伝えるように，彼らに求めていました。なぜなら，光栄の十字架はドジュレの町を一段と美しくするでしょうから。彼らは何もそれをしませんでした。それが池に水が出なかったことの理由です。心の冷たさによる大きな惨禍が全世界におそいかかるでしょう。願わくは，司祭たちが，注意深くメッセージを読み，綿密に，彼らに対して求められていることを尊重するように。≫

≪誰かそこにいる人に，あなたにロウソクを渡すように頼みなさい。≫（Ｂ修道女に）

≪それに火をつけて，キリストがあなたから去ったばかりの場所におきなさい。願わくは，この聖堂にくる全ての人々があなたのまねをするように。≫

すぐあとで，

≪あなたはそれを，司祭と，あなたのことを聞こうと望む人々とに言うため，一日中の余裕があります。あなたはそれを思い出すでしょうし，人々はあなたの記憶力に驚くでしょう。願わくは，司祭が，メッセージを３回読み，それを繰り返し言うような人を見つけますように。その人は繰り返して言うことはできないでしょう。≫

大天使はマドレーヌを見て，言葉を継ぎます。

≪あなたの家に帰って私がこれから言うことを書きなさい。あなたは，司祭があなたに『聖心の週に，司教館で会う約束があります。』と言った時にその書きものを手渡すでしょう。

聖心の日に始めるノベナをしなさい。そのノベナはあなたに教えられたその奥義が，一日一つずつで出来ています。それから司教に会いに行きなさい。あなたは，自分を使わしたのは天主ですと言いなさい。彼に，全てのメッセージを渡しなさい。彼はそれについて調べるかもしれません。門戸は開かれ，司教の心は溶けるであろう。≫

マドレーヌは持ちながら，この書きものを大切にもっていました。

6月１２日水曜日，司祭は彼女に言いました。

「来週，司教館で会う約束があります。」

彼女は彼に言います。

「それは，聖心の週です。」

司祭「さあ，よく知りません。」

マドレーヌ「確かです。」

彼女は彼に，正にその時に，大天使が彼女に書けと言ったその言葉で書きものを渡しました。

彼女は，司教に会いに行くように駆り立てられたように感じていました。そして，まさにそれは，聖心の週でした。彼らは，聖心の祝日の日からいっしょにあるノベナをしました。

マドレーヌは司教のところへ赴きたくなりました。

「でも，こんな風に司教様に合うものではないから，私は会う約束をとらなければなりません。従わなくてはならないのです。」と彼女に司祭は言いました。

「常に従わなくてはならないけれど，私は従いたくありませんでした。私にこの強い望みを与えたのは天主様であると知っていますから。説明することの出来ないある衝動は，私にそこに行くべき力を与えていました。私の幻滅は，まったく大きかったのです。」

マドレーヌは，司教が彼女を受け入れてくれると確信していましたので，そのことで泣きました。人間たちを喜ばせるために，彼女は天主に不従順だったからです。

「天主様は，私をそのことで非難すると思います。」とマドレーヌは言います。

彼女は，モーターバイク以外には，移動手段は何もありませんでした。そして，司教館はたいへん離れたところなのです。

彼女は，そこに３か月遅れて行きました。

「もはや強い望みはありませんでした。恩寵はすでに去ってしまったのです。」彼女は，のちにこう言いました。

注：ラテン語の訳は，
≪聖なる御託身の玄義によりて≫
≪御誕生によりて≫
≪主の御受洗と，聖なる御断食とによりて≫
≪主の十字架と，御受難とによりて≫
≪御死去と御葬りとによりて≫
≪聖なる御復活によりて≫
≪崇むべき御昇天によりて≫
≪慰め主なる聖霊の御降臨によりて≫
≪永遠の支配権を持つ御名の御方によりて，主よ，全ての悪より我らを救い給え。≫

1974年6月の初金

イエズスは，現れませんでした。

18 回 目 の 御 出 現

1974年7月5日　金曜日

イエズスは，お現れになりますが，黙っていらっしゃいます。

1974年7月19日　金曜日

5月3日の予告の後，50日以上して池の中に水が発見されます……。

19 回 目 の 御 出 現

1974年8月3日

マドレーヌは，洗濯物が乾いているかどうかを見るために，自宅の庭にいます。自分の家に入るとき，彼女は，はるかかなたの十字架の場所から来るような声を聞きます。

≪大天使ミカエルです。私の言葉を聞きなさい。≫

マドレーヌは，声の方にひざまづきます。

≪池の三面を（セメントで）塗るように司祭に言いなさい。しかし，底は塗ってはいけない。第四面は，横の方向に巾いっぱいまで25cm塗りなさい。次に三段の階段をつくりなさい。あなた方は全て行列をつくって，ここに来て，恐れないでこの塵の水の中で体を洗いなさい。そして，あなた方は塵であり，塵に戻るのだということを知りなさい。しかし，あなたの霊魂は清められるであろう。この水は泉ではありません。地から出る水なのです。≫

≪自分の体が汚れるのをいとわずに，ここに清めに来る者は，幸いなるかな。≫

20 回 目 の 御 出 現

1974年9月6日　金曜日　聖堂で

MM修道女はマドレーヌと一緒にいました。マドレーヌは，喜んで叫びます。

≪あそこに　光が。≫

次に，御聖体の左に大天使ミカエルが現れます。彼は言います。

≪私は，あなたにあいさつします。≫

マドレーヌは，御聖体の少し左の彼の前にひざまづきます。彼は言います。

≪私の前で平伏せずに，あなたがあがめに来た御方の御前でこそ，そうしなさい。≫

マドレーヌは，立ち上がって御聖体の前にひざまづきました。その瞬間，彼女は，幾条もの輝く光線が，ホスチアから流れ出るのを見ます。その光は，生きているようで，光の泉のように，ホ

スチアから出る時に，絶えず新しくなっていました。（説明するのは，困難です。）

聖ミカエルは，少し引っ込んでいました。

≪幼いダヴィドの両眼のことを悲しまないようにしなさい。もし天主が彼にそうあることを望んだなら，それは，両目の閉じた彼のせいではなく，信仰の光に両目を閉じてしまった彼の両親のせいなのだから。ロウソクを，主が最後にあなたから去った場所に置きなさい。≫

この話の間にも，御聖体は，絶えず輝く光線を放ちつづけていました。そして，すべてが消えます。

註：眼疾にかかっているダヴィド少年は，マドレーヌの孫である。

この少し前，パリのある婦人は，信仰を失ってしまった息子のためにリジューの大聖堂で祈りをしている間，≪ドジュレ…。ドジュレ…。≫という声を聞いた。問い合わせてみたところ，彼女は，近くの小さな町にかかわると知り，そこへ出かけていった。彼女が司祭にその話をすると，彼は，激しく動揺した。

1974年10月の初金

イエズスは，お現れになりませんでした。

21 回 目 の 御 出 現

1974年11月1日　金曜日　諸聖人の大祝日

マドレーヌは，8時のミサに教会に行きます。次に，午後3時半に聖体の礼拝に行きます。彼女は，G少女と一緒に8時にふたたび聖体降福式に出かけます。

司祭が祝福しようと聖体顕示台を掲げる瞬間，御聖体のところに光の輪ができ，ホスチアは光線できらめきはじめるのです。

マドレーヌは聞きます。

≪これを大声で言いなさい。≫（彼女は，大声で繰り返しまし

た。）

≪"Dicite in nationibus". 諸国に,天主は,御自分のはしための口を使ってお語りになったと言いなさい。天主は，彼女に，大いなる試練は近いとお示しになりました。なぜなら，彼女は東から発出する人の子の印が，ただちに西にあるのを見たのですから。この人の子の印は，十字架です。まことに，私はあなた方に言います。全世界の人々が悔い改めるべき時が来ました。世界が始まって以来今日までになく，これから先にも，もはやないであろう，全世界の大変化は近いのですから，すでに予言されてある干ばつの災害が全世界に覆いかかる時，天主がお堀らせになった池だけが，水をたたえているでしょうが，これは飲むためではなく，あなたたちをそこで清めのしるしとして洗うためにあるのです。あなた方は，全て，天主がカトリック教会に建築せよとお求めになる光栄の十字架の足下で，悔い改めに来るでしょう。

その時にこそ，地上の全ての日々は，嘆き悲しむでしょう。彼らが平安と喜びを見い出すのは，この十字架の場所においてなのです。

激しい苦しみの日々の後，その時，天には，人の子御自身が，大いなる威厳と至上の力とともに現れ，地のすみずみより選ばれた人々を集めるでしょう。

≪幸いなるかな，罪を悔やんでいる人，何故なら彼らは，永遠の生命を得るであろうから。≫

まことに私はあなた方に言います。天と地は過ぎ去るが，私の言葉は少しも過ぎ去ることはありません。≫

その時，司祭は，沈黙の祈りのうちに，司教の代弁者となりながら，印を求めていましたが，マドレーヌだけにむかって，

≪彼らに，天主御自身の印以外の他の印はないであろうと言いなさい。唯一の目の見える印は，主の碑女の態度と主の言葉である彼女の言葉だけです。この言葉は，反論の余地のないものです。≫

≪もし人間が十字架を建てないなら，私がそれを出現させようが，もはや時はないであろう。≫

そして，光が消えます。

ラテン語の訳は：「諸国に言いなさい。」

22 回 目 の 御 出 現

1975年2月14日　金曜日 － 四旬節の第一金曜日

聖堂に，午後3時イエズスが現れます。それに先立って，光の輪が現れました。しかし，何もおっしゃいません。

マドレーヌは，礼拝の状態で10分ほどとどまっています。彼女は一人であり，四旬節中，毎金曜日に，主が来て下さると予感します。

23 回 目 の 御 出 現

1975年2月21日　金曜日　午後3時

司祭は，そこにいます。3時10分にイエズスはお現れになり，ほほえみ，真剣な様子でお話になります。

≪司祭に，あなたが預言したのは，天主の御名においてであり，天主によってであると言いなさい。メッセージを，信頼して謙遜にやり遂げるようにまかされている人々に渡すように。なぜなら私が求めていることを行う時はほとんどないのだから。≫

私にほほえみになりましたので，私は申し上げました。

「主にもう一度会えるとは，私にとって何んとよろこばしいことでしょう。私は，あと何度，主にお会いできるのでしょうか？」

しばらくほほえんでおられますが，お答えにはなりません。

しばらくすると，全てが消えました。

24 回 目 の 御 出 現

1975年2月28日　金曜日　午後3時から3時半まで

イエズスは，体に沿って両手を垂らしてお現れになります。マドレーヌにおほほえみなって，御左手を御胸にお置きになり，祝福するように御右手をお挙げになります。御顔付は，親切で一杯で，御表情と，目の表情はきわめて親切で，たいへん優しいものです。

数分後に，こうおっしゃいます。

≪司祭に言いなさい。私は，人々の心に私のあわれみを注ぎたいのです。まず第一に，メッセージを知っている人々に，そして次に，全世界に。

願わくは，光栄の十字架を建てるように，責任をもたされた人人が，盲目ではないように。闇から光へと呼ばれたこの預言者の印以外には別の印はないであろうから。

まことに，印については，別のものは与えられないでしょう。何故なら，この世代は最も偽善的であり，最も悪いからです。≫

マドレーヌをお去りになる前に，両腕を体に沿ってお下げになり，彼女におほほえみになり，お消えになりました。

25 回 目 の 御 出 現

1975年3月7日　金曜日　午後4時　聖堂で

イエズスが現れ，マドレーヌにほほえみ，司祭を眺めながら言います。

≪司祭に，『祝福され，聖とされたこの町は，全ての惨禍から愛護されるであろう。特に，私が教えた祈りのあとロザリオ一連毎日唱える全ての家族は。』と，言いなさい。≫

つづいて，主は，司祭の方向を眺めるのを止め，マドレーヌを

眺めます。両手を彼女にさしのべて，右手はずっと前に差し出して言います。

≪私が訴えるのは，マドレーヌです。（ほほえみながら）謙遜でありなさい。しかし，あなた自身のお手伝いは受け入れてはいけません。この世から，あなたが期待すべきものになにもありませんけれど，しかし来世において，あなたの喜びは，莫大なものとなるでしょう。≫

イエズスは両手をおろし，すべては消えます。

御出現の後，司祭は，彼女に毎回その長さを教えてくれます。彼女は時間が分かりませんから。

更に，彼女は時間がたったように感ぜず，地上に，しかも暗闇の中に再び戻るように感じるのです。

26 回 目 の 御 出 現

1975年4月14日　金曜日　午後3時

ここに光が。

主は，右手を胸におき，他方は，下にたらして，お現れになります。マドレーヌにほほえんでこうおっしゃいます。

≪マドレーヌよ，辛抱強く，祈り，大斎・小斎をしなさい。あなたに対して反対しようとしている冷やかしや悪口などに恐れず，辛抱強くありなさい。あなたの口から出たことばに信仰を持っている人はわずかなのですから。しかし司祭は，あなたの顔付に，見えないものの現存が映っていることを証言することができます。この数日の大斎ののちに，あなたは，ある重い務めを担うことになるのでしょう。≫

マドレーヌは，少しこの務めにおそれを抱き，主に尋ねます。

≪でも，私はもしかしたらこの務めを果たすことができないんじゃないでしょうか？≫

≪もし，私が，あなたに果たすべき務めを与えるとすれば，そ

れは，あなたにそれを果たすことができるであろうということなのです。≫

彼女を去る前に，彼女に言います。

≪私があなたに教えたように，両手を胸に交差させなさい。≫

主は，ほほえんで消えました。

マドレーヌは，こう書いています。

「イエズスの御まなざしは，説明しようもない善良さと優しさで満ちあふれています。イエズスのように澄んだ，子供よりも澄んだ目をしている人は誰もいません。御顔には，しわはありませんけれど，顔だちには年齢があらわれています。ほぼ，３０才ぐらいに見えます。彼を見ていると，肉体と霊魂とを同時に持っているような感じがします。なんという霊魂／純粋さ，清楚さ，神聖さが，御肉体を通してすけて見えます。彼が話すと，何も探し求めず，決して間違うことなく，何もためらわず，彼は，私が見た十字架のように，純粋で，明らかで，陰のない明晰さ，しわのない若さ，よごれのない清さなのです。」

「私がイエズスの現存を初めて強く意識した聖体拝領のあいだの，私の内的よろこびと同様に，定義不可能ですし，説明も不可能なのです。」

27 回 目 の 御 出 現

1975年３月２１日　金曜日　午後３時半

イエズスは，いつものように，マドレーヌに，彼女を迎えるように両手をのばして現れて，言います。

≪明日，私があなたに求めようとする務めを準備するため，ノベナを始めなさい。このノベナは，一日に一つの玄義と，私があなたに教えた祈りと，ロザリオ一連とから成っています。外界のことは忘れて，謙遜にそれを唱えなさい。

マドレーヌは尋ねます。

≪主よ，いつあなたは，私が果すべき務を教えてくださるのでしょうか？≫

≪聖金曜日に≫

イエスズは，マドレーヌをほほえみ，消えます。

イエズスは，彼女を重々しい様子でご覧になりましたが，きわめて優しく，きわめて親切でした。

28 回 目 の 御 出 現

1975年3月28日　聖金曜日

マドレーヌは，11時ごろ教会へ行きます。次に，午後3時に十字架の道行きをしに。そして5時ごろ，主は，姿をお現しになりませんでした。

彼女は，そこにいるであろう数多くの列席者のために，その晩をひどく恐れていました。8時半には，50人ぐらいの人々が教会にいました。

マドレーヌは，教会の奥の方，第一祭壇の向こうに，彼女の目からは見えないところの光に気付きます。彼女は，この光の方に進み，彼女に両手をさしのべて現れた主の御前でひざまづきます。

≪これを大きな声で言いなさい。どうして，あなた方は，十字架につけられたイエズスの死を泣くのですか。今日，あなた方の間に，生きているのに，と。

むしろ，今日，昨年よりも一段と，彼を迫害する人々のために祈りなさい。

三歩後ろへ下がって，腕をまっすぐ左右にのばして十字架をつくって，私があなたに口述することを繰り返しなさい。≫

イエズスは，祈るように，両手を交差させて目を天に上げました。御目は，真剣で悲しげでした。私には，御悲しみが強く感じられました。

ー　ああ天主，御身を冒瀆せる人々をあわれみ，彼らを赦した

まえ。彼らはそのなすところを知らざるなり。

ー ああ天主，世の躓きをあわれみたまえ。彼らを悪魔の霊から解き放ちたまえ。

ー ああ天主，今日，昨日よりも一段と御身を迫害する人々をあわれみたまえ，人々の心に，御身のあわれみを注ぎたまえ。

イエズスが両手をおろすと，マドレーヌは，御足の下に一つの玉を見ました。イエズスは，両手を列席者たちに充分高くお広げになりました。両手のひらからは，赤白の光線が放出していました。イエズスは，マドレーヌにおっしゃいました。

≪これを彼らに言いなさい。（マドレーヌは大声で繰り返します。）ナザレトのイエズスは，死に打ち勝ったと，彼の御国は永遠であると，彼は，世と時とに勝ちに来ると知りなさい。≫

マドレーヌは，大きなよろこびを強く感じました。彼女は言いました。

「私は，主が地球を支配しているとわかっていました。私には主が権力と光栄のうちにいらっしゃると思われたのです。御足の下の玉は，地球でしたから。」

彼女は，イエズスの言葉を大声で繰り返します。

≪マドレーヌが，三年前のこの日に見た，光栄の十字架によって，人の子の印である光栄の十字架によってこそ，世界は救われるであろう。

私たちの面前にいるイエズスは，今，あなたがたが皆，列をなして，光栄の十字架が現れたところへ行くように求めます。行ってそこで悔い改めなさい。あなた方は，そこで，平安とよろこびとを見い出すでしょう。イエズスは，毎年そこで荘厳な祝日がーこの日に，祝われることを求めます。≫

≪Notum fecit Dominus a Magdalena Salutare Suum(*).≫

次に，マドレーヌだけに，

≪家に帰ったら，私がこれからあなたに言うことを書きなさい。≫

イエズスは，私をご覧になって，私にほほえみました。御右手

(*) ラテン語の訳は，「主は，マドレーヌを通して，その救いをお知らせになった。」

を私の方にお出しになりました。地球と，光線は，消えました。御眼差しは，とても甘美なものです。

≪マドレーヌよ，あなたは，私の愛の反映となるべく選ばれたのです。あなたが非常に燃え立っているのは，そのおかげなのです。この光栄の日の後に，ある大いなる務めを果たしてくれませんか。≫

マドレーヌは，大声で『願わくは，御旨の行なわれんことを。』

≪私があなたに教えた祈りを三百二十回書かせて，私の使徒になりなさい。

≪この町の境まで，その全ての家庭に行って，ナザレトのイエズスは，死にうちかったと，その御国は，永遠であると，彼は，世と時とに打ち勝ちにくると言いなさい。これを大声で言いなさい。あなた方は，全ての事件が，書かれている約束の印である時に生きています。≫（マドレーヌに，大声でくりかえしなさいとは言わずに）

≪私は，彼らが毎日その祈りを唱え，その後，ロザリオ一連を唱えることをのぞんでいます。大いなる信頼をもってそれを唱える全ての家庭は，全ての大異変から護られるでしょう。そして私はその心に，私のあわれみを注ぎましょう。

もし，誰があなたをつかわしたのかと尋ねられたら，ナザレトのイエズス，復活した人の子ですと言いなさい。侮辱と悪口，あなたに反対する冷やかしを恐れないように，ということを覚えていなさい。あなたは，私の名のために，憎まれるでしょう。しかし，終りまで耐え忍びなさい。もしあなたが望むならば，誰かもう一人に同行してもらいなさい。あなたには，この務めを果たすために時は充分あります。あなたの家庭は，それのために苦しむ必要はありません。この最後の聖年は，光栄の十字架の建立の日まで終らないからです。しかし，願わくは建築の務めを負わされた人々は急ぐように。時は近いからです。あなたに門を閉じる家庭には，再び行ってはなりません。

これを大声で言いなさい。人間によって世に罪が来たのです。それ故に，私は，人間に光栄の十字架を建てさせるように求める

のです。
彼らには，光栄のうちに私が再び来たのちに，あなた方は，この卑女が私を見るように私を見るであろうと言いなさい。≫
そして，イエズスは消えます。
マドレーヌは，立ち上がって，教会にもどりました。彼女がもどった時，彼女は，皆の彼女を目る目付が変わったのに気付きましたので，あえて自分の場所に戻りませんでした。司祭は，彼女に，教会の側廊を通って行くように合図しました。

註：８時半の御受難の典礼の後，司祭は，５０人ほどの列席者に，彼らが見聞きしたこと，理解できなかったことを黙っているようにと，強く忠告した。彼は説明を望む人々には，個人的に自分のところに会いにくるようにとつけ加えた。

29 回 目 の 御 出 現

1975年４月１１日（金）　午後３時

マドレーヌは，一人で聖堂にいます。
イエズスは，彼女に両手をひろげて現れ，彼女にほほえみ，こう言います。
≪司祭に言いなさい。私は，全世界にメッセージを知ってもらいたいと。明らかにされるべきで隠されねばならないものは何もないのだから，司祭たちは，公然と恐れずに話さなければなりません。≫
そして，イエズスは，彼女にほほえみ消えます。

30 回 目 の 御 出 現

1975年５月２日（金）　午後５時４５分　聖堂で

マドレーヌは，一人です。彼女は，御聖体の前でひざまづくように招かれているという感じはしません。その場所から，徐女は，突然，御聖体が赤白の光線を，いつも活き活きと絶えず新しいものを，発出しているのを見ます。その光線は，太陽の光のように動かないものではないのです。

メッセージも，声もありませんでした。それにもかかわらず，光線に場所をゆずるために聖体顕示台は，消えていました。

（それは，およそ，3分ぐらいつづきました。）

31 回 目 の 御 出 現

1975年5月30日（金） 午後3時 聖堂にて

えも言われぬ優しい眼差しで，イエズスがあらわれます。

≪司祭に，もはや私が肉体を復活させる時ではないが，しかし，私が霊魂を復活させるべき時は来た，と言いなさい。今日，私の名によって肉体の復活と治癒を望む，世界中の人々は，天の私の父にふさわしくないのです。≫(*)

≪マドレーヌよ，行ってドジュレでの私のメッセージを発表しなさい。私があなたにやり遂げるように求めた仕事は，あなたはやりとげねばなりません。恐れないようにしなさい。私は，あなたに，それを果たす力を与えよう。≫

（次に，ほほえみながら）

≪この町は，私の父が祝福し，聖とされました。光栄の十字架の足元に悔い改めに来る人々は全て，私が，私の父の霊のうちに復活させましょう。彼らは，そこに平安とよろこびを見出すでしょう。≫

（そして，重々しい態度で）

≪メッセージを運びながらあなたに接吻をした最初の修道女は，あなたの口から出た言葉を信じていません。彼女は，あなたを過小評価しています。それを根にもってはいけません。寛大であり

なさい。≫

そしてイエズスは消えます。

（もし，この勧告が尊重されたなら，それは，誤った解釈を生ぜしめる理由となった。

この勧告は，キリストがその人々に対して ― そして，将来の他の人々に対して ― したばかりの準備とイエズスがマドレーヌにやり遂げるように命じになった偉大な仕事を容易にするように運命づけられた準備をも，無効にした。）

(*)注：イエズスのこの思いがけない公表に，それを司祭に通告したマドレーヌは非常に驚いた。一方，司祭は，その朝，ソム県のアミアンに住む１５才のアンヌの手紙を受け取り，彼は，マドレーヌに朗読する。アンヌは，司祭にこう書いていた。

「私は，神父様を存じませんが，神父様に知ってもらいたいことがあります。聖霊降臨の日に，ドジュレを通ると，教会に入りたいという強い望みを感じました。それ以来ドジュレのキリスト様のことしか考えていません。私は病気です（白血病）。皆んなはそれを私に隠していますけれど，それでも，私はそのことを知っています。でも，私の回復のために祈らないで下さい。ただ信仰のない私の両親の改心のために祈って下さい。だって私には，自分の肉体は死にかかっているけれど，自分の霊魂は，私の救い主イエズスにおいて目覚めていると，分かりますから。」

全てが説明されていた。

32 回 目 の 御 出 現

1975年6月27日（金）　午後3時15分

午後3時に来て，マドレーヌは，出かけようとしていたところでした。3時１５分，光が現れ，次にキリストが，彼女に右手をさし出して，左手は，体にそってつけて現れます。　彼は，彼女にほほえみ，言います。

≪この町に住んでいない修道女に，どうかここに，金曜日に来て下さいと言いなさい。願わくは，彼女がなにか書くものを身につけているように。あなたの口を通して，私は彼女にあるメッセ

ージを伝えるであろう。
イエズスは，一瞬ほほえんで，消えます。

33 回 目 の 御 出 現

1975年7月4日（金） 午後3時50分

司祭は，ロザリオの第3連を唱えたところです。光が現れ，次にイエズスが現れます。

彼は，マドレーヌを見てからJ修道女を見ます。彼女は何か書くものをもっていました。

≪大きな声で，こう言いなさい。これは，修道女が書かねばならないことです。この手紙は，教会のかしらあてです。あなたに，その手紙を，卑女の口を通して書きとらせるのは，ナザレトのイエズスです。彼は言います。私の父に呼ばれ，平安とよろこびをこのドジュレの土地に見出した人々は，幸いなるかな。全世界が私があなたに建築するように求めた光栄の十字架の足元に悔い改めに来た時，その数はどんなに多いことだろうと。

というのは，もはや私が肉体を復活させる時ではなく，私が，霊魂を復活させるべき時が来たからです。

これをよく理解して下さい。ノエの大洪水以前の日々は，人々は，全てを奪い去った大洪水が来るまで，何も予期していませんでした。しかし，今日，あなこ方には，知らされています。あなた方は，私があなた方に言っていた時に生きているのです。

この地上に，あらゆる種類の大混乱があるでしょう。貧困と飢との原因である不正行為。国々は，不安におち入るでしょう。天と地上とには，異常な現象や印。それゆえあなた方は，準備をしていなさい。世の初め以来この日まで，かって似たものがなかったような，そして，もう以後もないような大いなる試練は近いのだから。

私はあなた方に言います。この若い世代は，それを避けて通る

ことはないであろう。 でも，少しも恐れないように。マドレーヌが東西にわたって光り輝くのを見た人の子の印が，ほら，天に建てられるのだから。あなた方，教会のかしらたちよ，私はあなた方に言います。諸国が救われるのは，地球上に立てられたこの十字架によるのです。

私の父は，救うために私を遣わされ，私が人々の心に，私のあわれみを注ぐべき時が来たのです。

（次に，もう少し小さい声でマドレーヌだけに）

≪私のメッセージは，引き出しの陰にねむらせてはいけません。それは，全世界にとって，真理と光とになるべきなのです。≫

（次に大きい声で）

≪この光栄の十字架は，聖年の終りに建てられるべきです。この聖年は，光栄の十字架の建立まで延ばさなければなりません。

これで，私のメッセージは終ります。私は，あなたにこれを，あなた自身が，長上と同行して，教会のかしらに渡すように命令します。≫

そして，イエズスは消えます。

メッセージは，J修道女がそれを書くのに十分な時間があるほどゆっくりと口述されました。彼女は，大司教様が，彼女に，教皇様にそれを持っていくように命令されるのを待っています。マドレーヌは，その内容を忘れてしまいました。

34 回 目 の 御 出 現

1975年9月19日（金）

この日，修道院長とJ修道女とが，大司教に午後4時に招かれることになっています。マドレーヌは，金曜日には，いつもするように午後3時に聖堂に行き，一時離れて，ある修道女が彼女に会合の時間を指示したので4時にまたもどります。

ロザリオを一連唱えた後に，マドレーヌは聖櫃のところに光を

見，声をききます。

≪司祭と修道女らと，メッセージのことを知っている2人の人にここに5時半に来るように言いなさい。≫

そして，光は消えます。

約束の時間に，光が現れ，次に両手をマドレーヌにさしのべたイエズスは，彼女を祝福するように，人指し指と中指とをぴんとのばして右手を上げます。修道女らによって選ばれた，T夫人とG夫人との2人もそこにいます。

イエズスは，マドレーヌに言います。

≪平安があなた方と共に。十字架の印をしなさい。≫

（イエズスは，両手を胸の上で交差させて，視線を悲しげに，重々しく，天に上げて言います。）

≪父よ，願わくは御身の御旨がこの地上で果たされますように。≫

（彼のまなざしは，たいそう悲しげです。彼は，このまま，少しとどまり，次にいつもの姿勢をとって，マドレーヌに，列席者を見ながら話します。）

≪大きい声でこう言いなさい。あなた方，メッセージを引受けさせられた司祭たちと修道女たちよ，人類が滅びへと走るのを放っておいてはならない。私は，あなた方に，光栄の十字架の建築のために働けと求めました。ひき続いて起こる不思議な現象のために，時は来たと互いに顔を見会わせないように。何故なら時は流れ，私のメッセージは，陰にとどまっているからです。もしそれがそこまで進んでしまっているのなら，救われる者の数は，わずかであろう。しかし，私の父の言葉を実行することのないあなた方よ，あなた方の罰は，大きいであろう。なぜならば，あなた方が裁かれるのは，救われた人々の数によっているのだから。

智恵と考察との手段を使うのはやめて，このメッセージのおろかさを聞きなさい。なぜなら，天主が，この世を救いたいというのは，このメッセージを通してであるからです。

ー印を求めているユダヤ人たちのようになってはいけませんー。

そうです，天主がその卑女に啓示になったこの独特で決定的なメッセージによるのです。

ー彼女の口から出る言葉は，人間のことばではありませんー。
そうです，聖霊が彼女に教えたことによるのです。私が人間たちの心に私のあわれみをそそぐべき時が来た。しかし，願わくはメッセージをまかされた人々が，世を無知のままに放っておいている故に，私を妨害しているのは自分たちであるということをよく知るように。選ばれた者たちのおかげでその日々は縮められるであろうが，天主の御言葉を実行しない人々は災いである，と覚えていなさい。≫

（続いてイエズスは彼女に言います。）

≪靴を脱いで，聖堂から出なさい。そしてあなたの足が土を踏むところまで行って，ここにもどりなさい。≫

（マドレーヌは，イエズスが彼女に求めたことをします。彼女が彼の前に再びひざまづくと，彼は彼女に言います。）

≪私の父が祝別し，聖としたドジュレの地は，私たちでさえも，足をその上に置くにはふさわしくはありません。≫

イエズスは，善良さと優しさとで輝く顔をとりもどします。彼は，彼女にほほえんで言います。

≪私は，善良かつ愛なる天主です。私のあわれみは限りがありません。今日，私の言葉がきびしいものだとしても，あなた方に有罪の宣告をするためではありません。かえって反対に，私は，自分のメッセージで，この世を救いたいのです。≫

そしてイエズスは消えます。マドレーヌがこれを書いた時，大司教は，2人の修道女らに，智恵と考察とを尋ねていました…。

イエズスは，ここで悲しげにそれに，答えていたのです

35 回 目 の 御 出 現

<u>1975年12月5日（金）　午後6時45分から</u>

ほとんど聖体降福式の時間で，この小さな聖堂は，人でいっぱいです。マドレーヌが，叫ばずにいられない例の光を認めると，

彼女のよろこびは，たいへん大きくなりました。

「ほら，光よ。」

彼女は立ち上がり，顕示されている御聖体の方へ行きます。

イエズスは両手を彼女の方へさしのべて現れます。マドレーヌにはもはや光しか見えません。

「それはたいへん美しく，何と言い現すことのできない甘美なものでしょうか。私には，もはや愛のイエズスしか見えません。私はもはや聖堂にはいません。もはや何も存在しないばかりか，私は何のことも考えていません。自分の肉体も感じません。肉体は死んでいるのだと思います。人が死んだとき強く感じる感覚がそれだと思います。もはやイエズスの魂と一致している私の魂があるのみです。

その時，イエズスは御自分の手を胸において，マドレーヌにこうおっしゃいます。

≪あなたがいまから見ることを大きな声で言いなさい：

御左手でイエズスは，御胸から衣をおとりになります。（イエズスはほほえみ，答えて，はっきりと述べます。）

聖心から赤と白との光線が出ています。右手は，私たちにさしむけられています。イエズスは言います。≪私のこころの炎は私をやきつくす。私は，かってないほどに，あなた方の一人一人にそれを注ぎたいのです。これは，人が私のメッセージを知り実行に移すとき，全人類に対する私の約束です。

一 私は，罪人らが陥っている辛さを和らげよう。

一 私は，恩寵によって，司祭及び修道者の霊魂を豊かにしよう。何故なら，私のメッセージが知られるようになるのは，彼らの手によるべきだからである。

一 私は，敬虔で，忠実な魂を私の聖心のそばにとどめておこう。彼らは，カルワリオの道の途中で，私を元気づけてくれた。

一 私は，私の恩寵の光線を，彼らが私のメッセージを知ろうとする時，異教徒と，全て私を未だ知らない人々とに，注ごう。

一 私は，異端と背教者との霊魂を，カトリック教会の一致へと招こう。

ー 私は，私の聖心の館(やかた)のうちに，子供らと謙遜な霊魂を受け入れよう。彼らが，天の私たちの御父への特別な愛情を持たんがために。
ー 私は，私のメッセージを知って，最後まで守り通す人々に，全ての種類の恩寵を与えよう。
ー 私は，煉獄の霊魂を慰めよう。私の血潮は，彼らの火傷(やけど)をいやすであろう。
ー 私は，最もかたくなな心，凍りついた霊魂，私の聖心をもっとも奥深く傷つける霊魂をも，再び燃えたたせよう。
ー 私は，光栄の十字架の下に痛悔にくる人々，及び，私が彼らに教えた祈りを毎日唱える人々全てに，この世においては，サタンは，彼らに対してもはや力を持つことはなく，しばらくけがれた時があっても，たちまちにして彼らは清く，永遠に天主の子となるであろうと約束しよう。
その優しさの，限りない私の父は，奈落の底に落ちかけている人類を救うことを望んでいらっしゃるのです。この最後のメッセージによって，あなた方を準備しなくてはならないのです。私のメッセージが実現するのは，あなた方がそれをもはや信じなくなるその時であると知りなさい。何故なら，あなた方は，私が栄光のうちに再び来る日付も時間も知らないのですから。≫
（次に，イエズスは，いつもの姿勢をとって，マドレーヌに言います。）
≪二十日後に，あなたは，あるノベナをしなさい。それは，初金でおわるでしょう。私はあなたに，毎日，あなたに教えた祈りを唱えるだろう。このノベナは，聖年を延長させるであろう。≫
「二十日後に，はい。ああ，なんて私は幸せでしょう……。」
（御約束をお語りになっている間は，赤と白との光線が，主の心臓から，始終出ていました。）
この二十日間は，マドレーヌは，待ちながら，祈りと，黙想のうちにすごします。彼女は「あたかもうら若い娘が，自分の婚約者を待つように」指おり日を数えました。彼女は，全くの愛，全くのあわれみであるこのイエズスと一致したように感じました。

彼女の喜びは大きく，それは，天にまでかき立てる霊的な喜びであり，彼女は，イエズスにそれを，不幸な孤独の人々や不信者に全て，分け与えてほしいとたのみました。
彼女は，この甘美な1975年の御降誕祭の夜眠ることができませんでした。
「この1975年の御降誕の日は，何と美しかったことでしょう。」

36回目の御出現

1975年12月25日　御降誕祭　午後3時15分から（ノベナの）第一日目

マドレーヌは午後3時に聖堂につきます。彼女はイエズスが来たり給うことを知っていますから，彼女の心臓は強く打っています。3時15分，光の輪が御聖体のところに形づくられます。マドレーヌは近寄り，ひざまづきますが，イエズスは現れません。彼女は，力強い声が発せられるのを聞きます。
≪天主は，人々に語られた。願わくは，メッセージをゆだねられている人々が，天主の声を聞くように，彼らの信仰が欠如しているために，全人類は，大きな破局を体験することになるだろう。そしてそれは，世界各地を激変させるであろう。この時に，あなた方が生きていることは，悲しみの始まりにすぎない。人類は，私のメッセージを知り，それを実行に移さないかぎり，平和を見出すことはできないであろう。≫
（次に，イエズスは現れて続きを言い，マドレーヌが繰り返します。）
≪ここに，これから八日間来てくれませんか。あなたは，私が毎日言う，あるノベナを唱えなさい。その優しさの限りない私の父は，破局を避けるために私のメッセージを世界に知らせたいと望んでいらっしゃいます。かってないほどに私は，私の聖寵のあふれを全ての苦悶する魂に注ぎたいのです。そしてこれが，私の

メッセージを知り，それを実行に移した時，その魂の各々に約束するものです。≫

≪第一日目≫

（この瞬間，イエズスは，左手を聖心にやり，御衣を開きます。そこから赤白の光線が発せられています。もう一方の手はマドレーヌに，全ての人に，世界にむかってのばされています。マドレーヌは一文ずつ繰り返します。）

≪私は，罪人らが陥っている辛さを和らげよう。≫

次に，イエズスは，マドレーヌに言います。

≪私と一緒に言いなさい。≪天にまします…≫（イエズスはたいそうおちついて全部をマドレーヌと一緒に唱えます。）

≪三回唱えなさい。≪めでたし…≫（マドレーヌは3回誦じます。）

≪こう言いなさい：主よ，御身の苦しき御受難によりて，我ら及び全世界をあわれみたまえ，天のいと高きところには天主に光栄あれ，地上にては天主を愛する人々に平和とよろこびあれ。≫

≪あなたは，これを毎日唱えなさい。≫

次にイエズスは消えます。

37 回 目 の 御 出 現

1975年12月26日　午後5時15分　第二日目

光，つづいて主が現れ，御左手を聖心へやります。聖心からは赤白の光線が出ています。イエズスは衣を開き，右手は世界にさしのべられています。イエズスは，マドレーヌが繰り返し言うまで，一文一文待っています。

≪二日目≫

≪私は，恩寵によって，司祭及び修道者の霊魂を豊かにしよう。何故なら，私のメッセージが知られるようになるのは，彼らの手によるべきだからである。≫

イエズスは言います。
≪天にまします…≫（マドレーヌは一人でつづけます。）
イエズスはつづけて
≪三回唱えなさい。めでたし…≫（マドレーヌは，一人で唱えます。）
次に，イエズスは続けて，
≪主よ，御身の苦しき御受難によりて，我ら及び全世界をあわれみたまえ，天のいと高きところには，天主に光栄あれ，地上にては，天主を愛する人々に平和とよろこびあれ。≫
（マドレーヌは繰り返します。）
イエズスは，両手をマドレーヌの方へ伸ばし，ほほえんで消えます。

38 回 目 の 御 出 現

1975年12月27日　午後5時15分　第三日目

光，次にイエズスが，いつものように現れます。マドレーヌは立ち上がり，前に進み，ひざまづき，イエズスにあいさつします。
≪三日目，（この瞬間，聖心から赤白のきらめく光線がほとばしり出ます。）
私は，敬虔で，忠実な魂を私の聖心のそばにとどめておこう。彼らは，カルワリオの道の途中で，私を元気づけてくれた。≫
イエズス，
≪天にまします…≫（マドレーヌは繰り返して，祈りを一人で続けます。）
次に，
≪めでたし…≫（マンレーヌは，一人で続けます。）
次に，前と同様に
≪主よ，御身の苦しき御受難によりて，我ら及び全世界をあわれみたまえ，天のいと高きところには，天主に光栄あれ，地上に

ては，天主を愛する人々に平和とよろこびあれ。≫

≪十字架のしるしをしなさい。≫

「御心から出る光線は，全ての痛悔する罪人たちと，全ての主を祈り求める人々へ施されるはずです。」とマドレーヌは説明します。

39 回 目 の 御 出 現

1975年12月28日　午後5時15分　第四日目

光が現れ，次にイエズス。両手はマドレーヌに差しのばされ，イエズスは，彼女に微笑みます。

≪四日目≫

（いつものようにゆっくりした動作で，御左手でイエズスは聖心をあらわにします。即座にそこから赤白の光線が発せられ，イエズスは，御右手を前に出します。手のひらはそこから見えます。マドレーヌは，イエズスが彼女に言うことを繰り返します。）

≪私は，私の恩寵の光線を，彼らが私のメッセージを知ろうとする時，異教徒と，全て私を未だ知らない人々に，注ごう。≫

≪天にまします……≫（マドレーヌは続けます「われらの聖父よ……」）

≪めでたし……≫（マドレーヌは一人で2回続け，3回目は忘れてしまいます。）

≪御身の苦しき御受難によりて，我ら及び全世界をあわれみたまえ。≫

イエズスは両手を前にやり，目を天にやって，一段と強く言います。

≪天のいと高きところにおいては，天主に光栄あれ≫≪地においては，天主を愛する人々に平安あれ。≫

マドレーヌをご覧になりながら，

≪十字架の印をしなさい。≫

マドレーヌは，感覚を再び取りもどし，もはや彼女の肉体の両眼は，キリストを見られなくなります。

40 回 目 の 御 出 現

1975年12月29日　午後6時30分　第五日目

マドレーヌは遅刻しています。しかし，彼女は以前のように引き寄せられたのは，6時半になってです。到着すると，丁度彼女は光に気付きます。イエズスは，いつものように姿を現しになります。

≪五日目≫

光線が聖心から発しています。

≪私は，異端と背教者との霊魂をカトリック教会の一致へと招こう。≫

≪天にまします……≫

≪めでたし……≫（3回）

イエズスは，3回とも≪めでたし≫の最初の部分を言います。（マドレーヌによると，おそらく，前日のを忘れたため）マドレーヌは唱え続けます：

≪主よ，御身の苦しき御受難によりて，我ら及び全世界をあわれみ給え。天のいと高きところには，天主に光栄あれ，地上にては，天主を愛する人々に平和とよろこびあれ。≫

≪十字架の印をしなさい。≫

マドレーヌは答えて，「はい。」

「御両手は，とても優しく下に降していました。イエズスは私をご覧になり，私に微笑み，そして消えました。」

41 回 目 の 御 出 現

1975年12月30日　午後5時半より　第六日目

光が現れます。キリストは，マドレーヌが光の前でひざまづいた時でなければ，姿を現わさず，光より遅れていらっしゃいます。聖心からは，赤白の同じ光線が溢れています。イエズスは御右手を列席者に向けて言います。

≪六日目です。≫

≪私は，私の聖心の館のうちに，子供らと謙遜な霊魂を受け入れよう。彼らが，天の私たちの御父への特別な愛情を持たんがために。≫

≪天にまします≫マドレーヌは一人で唱え，同じく3回≪めでたし…≫≪主よ，御身の苦しき御受難によりて…≫≪天のいと高き…≫≪地上においては…≫≪十字架の印をしなさい。≫

「たぶん，もしもイエズスが私にその都度言わなかったら，私が忘れてしまうだろうから」とマドレーヌは言います。

次に，イエズスは消えます。

42 回 目 の 御 出 現

1975年12月31日　午後5時15分　第七日目

以前と同じように光，続いてイエズスが現れ，左手は聖心にあり，そこからは赤白の光線が発しています。右手は，列席者にのべられています。

≪七日目です≫

≪私は，私のメッセージを知って，最後まで守り通す人々に，全ての種類の恩寵を与えよう。≫

≪天にまします……めでたし≫（3回）≪主よ，御身の苦しき御受難によりて……≫≪天のいと高き……≫≪地上においては天

主を愛する人々に，平和とよろこびあれ。≫

光線は消え，御衣はもとにもどり，御両手は再びマドレーヌに差しのべられます。

イエズスは，マドレーヌに（大きな声で繰り返すようには言わないで）

≪三日後に，この町の司法官に言いに行きなさい。『ナザレトのイエズスは死に打ち勝ちました。御国は永遠です。イエズスは世と時間とを打ち破りに来ます。』と，もし，彼があなたに誰があなたをつかわしたのかと尋ねるならば，あなたは『それは，ナザレトのイエズス，復活した人の子です。』と答えなさい。彼に，メッセージを持っていきなさい。彼は，それを調べるであろう。≫

≪彼に，『天主は，あなたに，教会の所有地となるべき土地を教会に戻すべく委任なさっていらっしゃいます。』と言いなさい。≫

「でも，私は，冷たくあしらわれるのですね？」とマドレーヌ。

イエズスは，ほほえんで，

≪彼の態度は荒っぽいが，心は，変わっていくであろう。彼の自尊心から，それが表に現れないだけです。≫

マドレーヌ「主よ，私は御旨を果たします。」

イエズスは，消えます。司祭は不在でした。彼が帰ると，B修道女は彼にそのメッセージを伝えます。返事として，司祭は，司教の意見を聞かなくてはなにもしたくなかったので，マドレーヌに，そのメッセージを町長（≪その町の司法官≫）に持っていくのを禁じます。

マドレーヌは，本気でメッセージを町長に渡すつもりでした。彼女は，こうノートしています。「誰に従う？キリストに，それとも教会に？これで私がイエズスに不従順なのが２度だ。　神父様は，いつも私に禁止ばかりするけれど，私は，その従順が価値があることも知っている……」

彼女は，聖堂へ行き，そこで平安を見い出しました。

註：この禁止にもかかわらず，マドレーヌはA夫人と連れだって，会う約束をしてのちにメッセージを本当に町長に持っていった。彼は，彼女たちを，たいへんよく歓迎してくれた。次に彼は司祭と接触した。同じ晩に，司祭は，マドレー

ヌに，町長に対して彼女のとった態度に関して，彼らの強い不満を現わすために修道女たちをつかわして，マドレーヌをさがさせた。

43 回 目 の 御 出 現

1976年1月1日　午後5時40分から　第八日目

光が現れ，次に聖心をあらわにしているイエズス。そこから赤白の光線が発しています。赤い光線は，一段と多く，泉から，生命の泉から溢れる血潮のようです。光線は生き生きとしていて，軽く上にのぼり，下方へ伸びています。芝生にある噴水にちょっと似ています。光線は，絶えず新しくなります。

イエズスは，マドレーヌに言います。（マドレーヌは，それを大きい声で以前のように繰り返します。）

≪八日目です≫

≪私は，煉獄の霊魂を慰めよう。私の血潮は，彼らの火傷をいやすであろう。≫

≪天にまします……≫≪めでたし……≫（3回）≪主よ，御身の……≫≪天のいと高き……≫

イエズスは視線を遠くにやり，

≪地上においては，天主を愛する人々に平和とよろこびあれ。≫

聖心にやっていた左手を，そこから引込めると，光線は消えます。

≪十字架の印をしなさい。≫

イエズスはほほえみ，消えます。

44 回 目 の 御 出 現

1976年1月2日初金　午後5時53分　第九日目

いつものように光，続いて光を放つ聖心をあらわにして，イエズスが現れます。
≪九日目です≫
≪私は，最もかたくなな心，凍りついた霊魂，私の聖心を最も奥深く傷つける霊魂たちをも　再び燃え立たせよう。≫
≪天にまします…≫≪めでたし…≫（３回）≪主よ，御身の苦しき…≫≪天のいと…≫≪地上にては…≫
≪これを大きな声で言いなさい：（マドレーヌは，イエズスのあとで，一文ずつくりかえす。）
≪私は，光栄の十字架の下に痛悔に来る人々及び私が彼らに教えた祈りを毎日唱える人々全てに，『この世においては，サタンは彼らに対してもはや力を持つことはなく，しばらく汚れの時があっても，たちまちにして彼らは清く，永遠に天主の子となるであろう』と約束しよう。その優しさの限りなき私の父は，奈落の庭に落ちかけている人類を救うことを望んでいらっしゃるのです。この最後のメッセージによって，あなたがたを準備しなくてはならないのです。≫
≪十字架の印をしなさい。≫
次に，イエズスは，両手を下におろし，彼女に，繰り返すようには明示せずに，
≪一言も言わずに，あなたが聞いたことばを心のうちでよく考えなさい。時は流れるだろうけれども，あなたの信仰は揺るがないものとして残るはずです。≫
イエズスは，彼女にほほえみ，消えます。
マドレーヌは書いています。
「これで，素晴らしい九日間は終った。イエズスが私に言っていた最後のお言葉のために，私は，そんなに早くは，この後数か月はイエズスをもう二度と見ることができないだろうと思った。イエズスは，もう現れないのだ。イエズスのメッセージは，おそらく終ったのだ。
でも，イエズスが世界に伝えよと求めていて，教会が承認するように務めを負っているこのメッセージにもかかわらず，私は，

大いなる平安のうちにいる。ああ天主，御国の来たらんことを。しかし，その前に，御身のメッセージが全世界に行きわたりますように…」

「私は，疑う人々のために，イエズスが彼らを照らしますようにと祈る…イエスズは，いつも私の心の内に，特に，御聖体拝領のたびに，いらっしゃる…」

マドレーヌは，天主の御摂理の実現のために祈り，つぐないをします。

それから，ジェラールがドジュレに来ました。

マドレーヌは，いつも，彼をここに送って下さったのは，天主であったと考えました。彼女は，彼に，全ての信頼をおき，彼女が聖霊の助けで書いたノートを彼に委託しました………。

ジェラールへの御出現

そういうわけで，1976年12月10日金曜日にマドレーヌは，彼を，聖堂に来るように招きました。20分間の黙想ののち，彼女は，大天使ミカエルが，聖櫃の左に壁から出るのがわかりました。彼は，マドレーヌに，

≪わたしは，あなたにあいさつします。ジェラールに，「私が出向いてきたのは，あなたにです。」と言いなさい。≫

≪ジェラール，あなたは，メッセージを大いなる愛をもって受け入れてくれました。黙想を重ねるたびに，あなたの良心があなたに告げることをやりなさい。天主によって導かれるままになりなさい。メッセージを聞こうと望まない人々は，神の子とは，呼ばれないでしょう。≫

マドレーヌは，こう説明します。

≪私は，確かに聖堂の中にいました。イエズスが私に現れる時のように，天に移されたようには感じませんでした。

註：ジュラールがドジュレに来ることになった事情は，詳しく記載するに値す

る。作家ジャン＝ギトンの作品中に，ロルセ神父は，同じ主題に関して自分の文章とひどく似ているものに気がつき，それをこの作著に通報すると，ギトンは，彼に，この文章は彼のではなく，ジェラールC．のものだと答え，彼の住所をロルセ神父に教えた。ジェラールC．は，ロルセ神父に会い，ことのついでに，彼は，ロルセ神父の教区で神秘が起こっていると知った。一方，ジェラールは，理工科学校の卒業生であり，光学の大専門家等であるが，1933 年以来，全ての神秘的な現象，そして特に，現代の出現にも興味を寄せていた。かくして，彼は，丁度1976 年9月１４日の聖なる十字架の発見の祝日に，初めてドジュレに訪れ，そこに彼は受け入れられてよろこんだ。マドレーヌは情緒が安定しており，思慮分別があるというまれな性格であったので，厳しい調査と検査を数か月を経たのちイエズスからマドレーヌに伝えられた，独特で，決定的なメッセージの真正さは，認証されようとしていた。彼は，そこで，1972 年以来ひそかにされていたメッセージの普及にとりかかるが，このことは，教会当局の非難をひきおこした。マドレーヌは，彼に，もうドジュレには戻ってこないようにと頼む手紙を書かねばならなくなっていた時，自動車事故のために，彼は1977 年7月１２日に地上での生活を終えた。ジェラールは，光栄の十字架の実現には，何ら技術上の問題はないと確信していた。彼は，我々に，それに関する研究を残している。

45 回 目 の 御 出 現

1977年7月　初金

「神父さま」は，カーン（又はベイヨ）で司教に会うために外出していました。B修道女も同じく不在でした。この瞬間に聖堂にいたのは，マドレーヌとT夫人だけでした。マドレーヌは書いています：

「バリバリという音がして，大天使ミカエルが御聖体の左に現われます。私は，彼の前にひざまづきますが，彼は，自由な左手で私に，御聖体の方へ進むように合図します。

そこで私は近ずき，私がその前でひざまづこうとする瞬間に，イエズスは，私に御姿を見せないままで赤白の光線を発します。

イエズスは，実際そこにいるのです。私には，イエズスの光線がしみ込んだように感じられますから。大天使は私にこう言いま

す。≪私はあなたにあいさつします≫彼は，おじぎをして，私に言います。

≪愛徳に燃え立った信心深い娘よ，天主は，御自分の教会に：
1. まず，使徒たちを，
2. 次に，預言者たちを，
3. 更に，教父たちを，
そして，天主が選んだ他の人々を打ち立てました。今日，この世界では，あなたは，使徒であり，かつ預言者であるのです。誰に対しても，あなたの心に従って振舞いなさい。慰め主があなたを導きますから。天主は，明日の夜明けとともに起こるべきことを，あなたが，イエズスキリストに関して見，聞き，触れたことすべてを証言しながら，知らせました。しかしながら，大胆不敵な司祭らは抵抗し，拒みました。それ故に，この世には災いあれ，天主は，この従順への拒絶に対してお怒りになっていらっしゃいます。天主の怒りは厳しいものです。しかし，柔和で，おとなしい方，イエズスの愛は，御自分がすべてをかえりみずに人々を救おうと望まれる程，いとも寛大なのです。なぜならこの世代は，無為な司祭らのため，そして，天主がこの世を裁くべき日が到来したために，最も偽善的であり，最悪だからです。 イエズスは，御自分の言うことを聞く全ての人々に聖寵を与え，御自分のメッセージを知らせようとし，それを実行に移す人々を幸せな者と宣言するのです。しかし，マドレーヌよ，あなたは，それを司祭に渡すという務めを負わされました。彼のいうことを聞き，彼と一致していなさい。イエズスがあなたに与えた平安のうちにとどまりなさい。心のうちに黙想し，祈り，祈りなさい。イエズスは，御自分の教会の堕落に泣いていますから。≫

大天使は消えます。ひき続いて，御聖体をとりかこんでいる光線も消えていきます。

註：主は，確かに，はっきりとおっしゃった。「司祭は，自分にまかせられた務めをなしとげる前に自分の教区を去ってはならない。」（ 6回目の出現の時）。司教は，司祭が変わっても出現が続くかどうか確かめたく思い， 1977 年7月1日に，ロルセ神父に，ポンファルシーに移動するように告げた。彼は，悲しみで

胸が一杯であったにもかかわらず，神父は，かくしてメッセージの原因（究明）に役立つと思い受け入れた。彼は，司教の呼び出しに従おうとした時，自動車がパンクし，しかも，彼を援助しに来た修道女の自動車もパンクしてしまったと記録している。ロルセ神父にはメッセージが心に深くしみ込み，そして，それに注釈をつけるために，しばらくの間，会合を開いた。後任となったケドビル神父は，出現に関して全く知らなかった。

1977年7月12日。ジェラールC　死去。

46 回 目 の 御 出 現

1977年12月2日　初金　聖堂にて

光の後に，ホスチアから光線が放出し，マドレーヌは，自分に語りかける声を聞きます。

≪あなたの手記を，人間によって任命された司祭に渡してくれませんか。≫

マドレーヌは，これを果しました。

47 回 目 の 御 出 現

1978年2月3日初金　午後6時15分から

話しているのはマドレーヌです。

「私は聖堂に午後2時から4時半まで，イエズスを賛美しに行きました。私はそして，学校から帰宅していた子供たちにおやつを与えてのち，5時半に戻りました。

私は，そこにその時間に行くのは，引き寄せられたように感じたからと思います。教会で6時15分の鐘を聞き，そこでは一人っきりでした。私は，うれしくてぞくぞくします。光が御聖体の所すべてをいつものように埋めつくすからです。つまり，もはや聖体も祭壇もないのです。そしてイエズスが，両手を私を迎える

ようにのばして現れるのです。

私は1976年1月2日以来（ノベナの最終日）イエズス御自身を見ていませんでしたから，とてもうれしいのです。

イエズスは私に言います。

≪十字架の印をしなさい≫（次に，目は天に向かい，両手を胸の高いところで合わせて言います。）

≪天の私の父の御名において，私は命令します。サタンはあなたを誘惑しています。私が人類に約束を与えた九日目の後に，サタンは私のメッセージ(*) を混乱させに来ました。これをよく聞きなさい：

（イエズスは私を眺めています）

≪父なる天主が幸いなるミカエルを遣わすときには，いつも光が彼が来るよりも先に現れます。私の言葉を思い出しなさい。私の名において悪霊が現れるでしょう。彼は，あなたをだまし，光の天使として，あなたの家の中にさえ来るでしょう。それを信じてはなりません。彼らはあなたを誤りへ導くのです。警戒しなさい。あなたは用心していなさい。あなたは，サタンが鎖を解かれ，精一杯働いている時を生きているのです。しかし，私は悪を打ち砕きに来ます。そして，その時はとても近いのです。≫

（次に，イエズスは両手を，私を迎えるようにさげて，私に長い間ほほえみ，こう言います）

≪マドレーヌよ，あなたは，私のメッセージの唯一の目に見える印ですから，もはや誤りに陥らないようにしなさい。私は，あなたに命令します。今後は，光があなたに現れるやいなや，十字架の印をしなさい。もしそれがサタンであれば，その瞬間に，全て消えうせるでしょう。≫

（イエズスは，長く私にほほえみ，こう言います。）

≪平安があなたとともにあれ。≫

そして，暗闇になります。

「修道女たちは，ブリュクールでのミサに出かけていました。戸はあちこち閉めてあると私は思いました。私は，急いで御言葉を書きに家に戻りました。私は，バス・トイレの部屋に引きこも

≪あなたが見ることを彼らに言いなさい。≫≪私はイエズスが座っているのが見えます。彼の前に祭壇のようなテーブルがあり，聖堂にある祭壇はもはやありません。真っ白なテーブルです。白い石のようです。このテーブルの上に，開いた本がいくつか。6冊か7冊。正確には分かりません。次にもう一冊のやはり開いた本をイエズスは手に持ちます。≫

イエズスは，私に，続いてこう言います。

≪これを大きな声で言ってくれませんか？≫

（私は一文ずつ繰り返します。）

≪注意しなさい。ヴェールをかぶった女性のあなた方よ。あなた方に委ねられた預言の言葉，私が手にする本，それは私の父が私に開く力を与えたばかりである。生命の書，そして，全てのことが一新されるであろうのは，この祝福され，聖とされた山，天主がお選びになった地においてです。あなたが，聖なる都新しいイエルサレムを見るのは，ここなのです。

そして，ここに，あなた方のうちに，天主の住居が現れるでしょう。しかし，その時この卑しい使い女が口にした言葉を聞くのに抵抗し拒否した人々は，自分の胸を打つであろう。私から私のメッセージを宣べ伝えるよう要求されたあなた方は，もうすぐ起こることに関して，この世を無知のうちに放っておいたことに関してとがむべきである。あなただけの考えをあてにしないようにしなさい。私の教義に適う聖寵をあなたに与えたからといって，なぜあなたは抵抗するのですか？　あわれみによって，私はあなたに，私の言うことを聞くように頼みます。私の心は，あわれみで満ちあふれているのです。≫

イエズスは立ち上がります。テーブルは消えます。彼はしばらく私にほほえみ，こう言います。

≪司祭とあなたが出会う人々とに，あなたが見聞きしたばかりのことを言いなさい。あなたは，一日中，それを覚えているでしょう。≫

次に，イエズスは突然消えます。「私は暗闇に再びおちました。」

≪あなたが見ることを彼らに言いなさい。≫≪私はイエズスが座っているのが見えます。彼の前に祭壇のようなテーブルがあり，聖堂にある祭壇はもはやありません。真っ白なテーブルです。白い石のようです。このテーブルの上に，開いた本がいくつか。6冊か7冊。正確には分かりません。次にもう一冊のやはり開いた本をイエズスは手に持ちます。≫

イエズスは，私に，続いてこう言います。

≪これを大きな声で言ってくれませんか？≫

（私は一文ずつ繰り返します。）

≪注意しなさい。ヴェールをかぶった女性のあなた方よ。あなた方に委ねられた預言の言葉，私が手にする本，それは私の父が私に開く力を与えたばかりである。生命の書，そして，全てのことが一新されるであろうのは，この祝福され，聖とされた山，天主がお選びになった地においてです。あなたが，聖なる都新しいイエルサレムを見るのは，ここなのです。

そして，ここに，あなた方のうちに，天主の住居が現れるでしょう。しかし，その時この卑しい使い女が口にした言葉を聞くのに抵抗し拒否した人々は，自分の胸を打つであろう。私から私のメッセージを宣べ伝えるよう要求されたあなた方は，もうすぐ起こることに関して，この世を無知のうちに放っておいたことに関してとがむべきである。あなただけの考えをあてにしないようにしなさい。私の教義に適う聖寵をあなたに与えたからといって，なぜあなたは抵抗するのですか？　あわれみによって，私はあなたに，私の言うことを聞くように頼みます。私の心は，あわれみで満ちあふれているのです。≫

イエズスは立ち上がります。テーブルは消えます。彼はしばらく私にほほえみ，こう言います。

≪司祭とあなたが出会う人々とに，あなたが見聞きしたばかりのことを言いなさい。あなたは，一日中，それを覚えているでしょう。≫

次に，イエズスは突然消えます。「私は暗闇に再びおちました。」

49回目の最後の御出現

1978年１０月６日（金）　午前９時１５分

御聖櫃にいらっしゃるキリストを訪問するため，マドレーヌは9時に聖堂に着きます。彼女は一人きりです。彼女によると，

「９時１５分に，光が現れました。私はＢ修道女をさがしに行こうと思っていました。しかし，私にはそうする時間もありませんでした。イエズスは，私を迎えるように両手を差しのべて私に現れました。彼は私に言います。

≪十字架の印をしなさい。≫

（彼はいつも私にほほえんでいます。彼は両手を合わせてさびしそうに言います。）

≪ぼやっとしてないで，祈りとつぐないをしなさい。≫

（彼の様子は重大そうでした。）

≪マドレーヌ，これで３回，私はあなたに，私が求めた仕事をなしとげながら，私の使徒となるように求めます。恐れないで下さい。あなたは，私のために憎まれるでしょう。しかし，続いてこの町から光の子らが立つでしょう。≫

（すこし黙ってのち）

≪今日は，あなたは，もう少しの間私を見ることができる。しかし，もうこれからは私を見ることはないであろう。けれども，私は，あなたを，私の体と私の血によって訪れつづけよう。≫

（少し黙ってのち）

≪しかし，地上にこの十字架が建立されたあかつきには，あなたは私をもう一度見るであろう。なぜなら，その瞬間，私は，開かれたばかりの生命の書のうちに書かれている奥議を教会に明かすからである。あなたが見聞きしたばかりのことを，司教に言いなさい。≫

（続いてイエズスは，私にほほえみ，こう言います。）

≪私の懇願にもかかわらず，心をみださないようにしなさい。あなたは，この世では，誰一人も持っていない智慧を持っていま

す。あなたの静けさと，あなたの沈黙は，行動と頑固さが支配している この世界において，私の言葉の目に見えるしるしなのです。願わくは，あなたの顔が，いつも目に見えない存在を映し出しますように。私はあなたに言います。あなたの長上に従いなさい。唯，彼だけがこの地で私の父の御旨の実現させる務めを負っています。しかし，ぐずぐずしているため危険な状態にあるこの世界に災いあれ。≫

続いて，イエズスは私にほほえみ，消えます。

註：この御出現の前，マドレーヌは，誰に従うべきかを知るために，あるノベナをしていた。

一　主は，確かに「もはや私が肉体を蘇らせる時ではないが，霊魂を蘇らせねばならぬ時が来た」とおっしゃっている（３１回目と３３回目の御出現）。このような蘇りが１９７９年に生じて，マドレーヌは大いによろこんだ。というのも，それは彼女の夫の蘇りだったからだ。彼女は，この年，十字架の幻とキリストの御出現を彼に打ち明けた。彼女の夫は，率直で良識ある人であり，自分の妻が光栄の十字架を確かに見たのだと妻に確信させられて，涙を流して感動し，数年来初めて，聖堂に再び入り，ひざまづき祈った。

———追加注———

32ページ imperti について。長い間考察し，数人のラテン語の専門家にうかがった後，我々はためらうことなく，ラテン語には，≪imperti≫という単語は存在せず，あたえる，誰かにその部分を与えるという意味の，動詞≪impertio≫の形においても存在しないという結論に達した。聖ミカエルは，「支配権」という語を用いて，その文章の逐語訳ではない，正確な意味を示しているが，それは，ラテン語の≪imperium≫を予想させる。綴字の正確さから言うと，≪imperii≫と読み，「その御国の名が永遠である方を見よ」と翻訳されるべきである。かくして≪imperium≫という単語は，御降誕の第三ミサの入祭文中，及び王たるキリストのグレゴリアンミサの入祭文中にもある。そこで確かに，それは王たるキリストが≪権能と大いなる光栄とをともなって≫来臨されることに関係しているのである。

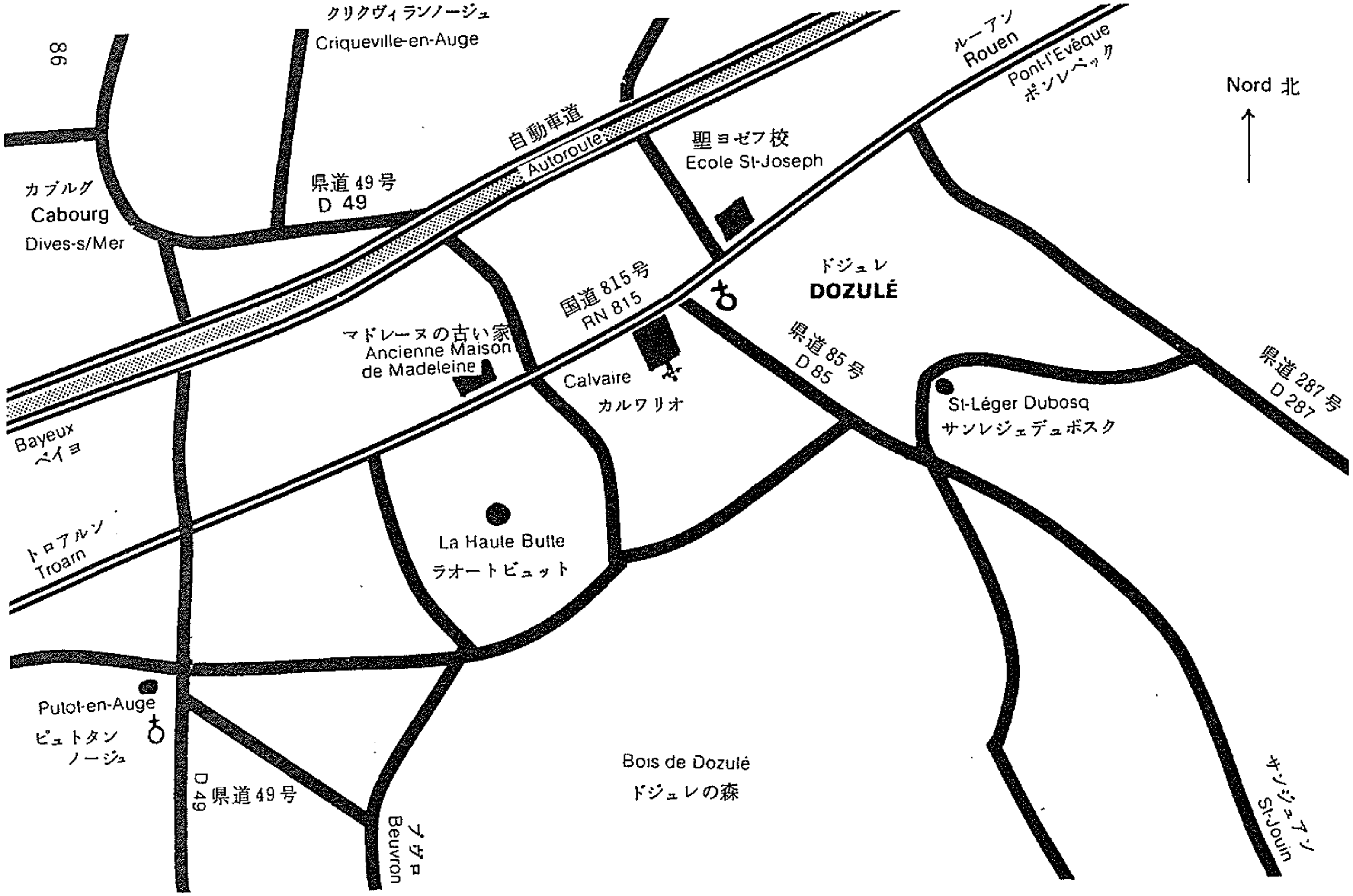
33ページ 第14．15．16回目の御出現で，主の「訪れ」あるいは「幻視」の数え方が問題となっている。

一　14回目は，≪イエズスは，私をこれで八度訪れてくれます。≫と言われ，ここでは７回目の御出現は「訪れ」として数えられている。

— 15回目は，≪私が今日，七度目に見る≫と言われ，ここでは7回目の御出現は，数えられておらず，マドレーヌが何も≪見≫なかった 13回目も数えられていない。

— 16回目は，≪主は，私を17回目として訪れて下さった≫と言われている。つまり，ここでは，7回目は，光栄のうちのキリストの2回の「訪れ」として数えられ，最初の6回の光栄の十字架の御出現も「訪れ」と数えられている。
（6＋2＋8＋この第16回目＝17回）

祈りは，毎日午後3時より
ドジュレの，ラオートビュットにて。
（86ページの地図参照）


Nord 北
ルーアン
Rouen
Pont-l'Evêque
ポンレベック
クリクヴィランノージュ
Criqueville-en-Auge
自動車道
Autoroute
聖ヨゼフ校
Ecole St-Joseph
県道49号
D 49
カブルグ
Cabourg
Dives-s/Mer
ドジュレ
DOZULÉ
国道815号
RN 815
マドレーヌの古い家
Ancienne Maison
de Madeleine
Calvaire
カルワリオ
県道85号
D 85
県道287号
D 287
St-Léger Dubosq
サンレジェデュボスク
Bayeux
ベイヨ
トロアルン
Troarn
La Haute Butte
ラオートビュット
Putot-en-Auge
ピュトタン
ノージュ
D 49 県道49号
ブヴロ
Beuvron
Bois de Dozulé
ドジュレの森
サンジュアン
St-Jouin

光栄の十字架の建築について

ジェラール　C

1974 年 4 月 5 日金曜日に指定された≪腕はそれぞれ 123 *m*，高さはその 6 倍≫(= 738 *m*)でなければならない。

２１*m*，４２*m*，６０*m*の梁の幅で，十字架の３つの計画が描かれた。４２*m*で抑えるなら，十字架の全体の大きさは，

123 + 42 + 123 = 288 *m* = 2 × 144000 mm

となり，地上の贖われた 144000 人を暗示する (黙 14の3)。 さて，123=3×41 である。それを組立てるときに軽く補修すれば，横木に，４１メートルの正方形の骨組みを７個，プラス，縦の梁に１７個 (横木の上部に３個，下部に１４個，合計の高さは１８個) で十字架を構成することができる。この２４個の全く同じ骨組みは，その場でプレハブの部分を組み合わせてつくることができるであろう。骨組みは互いに柔軟な連結部品によって，嵐の際の風の急変に耐えるために緩衝器と一緒に結びつけられる。骨組みをつむのは，高さ５０メートルの垂直の滑車などに，東西の支柱に同時に上にあがるモーターをとりつければ，足場なしに，実現されうるだろう。最上部の骨組みはその場所で，下に２番目の骨組みを入れるために，４１*m*だけもち上げる。次に，２回目に４１*m*だけもち上げたのち，３番目を入れる。次に横木の腕をとりつけ，ロープで上部３個の骨組に吊り下げてのち，４番目を入れ，次に５番目…と，１８番目が下に入るまで１７回もち上げる。

三本のロープを編んだものを，いくつか使って，時速 150 Kmの風に耐えることになると計算される十字架を安定させる。おのおのの骨組みは，「ぺしゃんこ」にならないように，内部補強として，その側面を，三角形の持続部で結ばれた空洞の３本の円柱で構成されることになろう。おのおのの骨組みの空洞の中部は，ナイロンのロープで張りめぐらされるであろう (例えば４０本)。それは，水平に張られ，各々４０枚の蛍光を放つ，たいへん軽いプラスチックの薄板をささえる。その薄板は十字架に最小の負担

をかけつつも，風に吹かれてゆれることができるように，ゆったりと吊り下げられている。

地上に設置された，十字架の南北にある紫外線の照明灯は，風向きがどうであろうとも薄板を照らすであろう。遠くから輝く十字架を見ると，その表面全体が，1600×24 枚（約40000 枚）の蛍光を放つ薄板できらめいて見えるであろう。

好都合なことにも，全世界が関心を寄せるに十分な新しい技術によると，「重さのない骨組」を創ることができる。3本の円柱の中にヘリウムか，もしくは，水素でふくらませた円筒形の小気球を閉じ込め，それらを，漏れの埋め合わせに少し圧力を加えて保つようなバルブで結びつけるのである。十字架の組み立ては，容易になるであろう。危害になる場合にも，骨組みの落下は，大事には至らないであろう。下部の骨組みは，上部の骨組みによって押しつぶされないように耐える必要もないのである。

御手紙はすべて Les Amis de la Croix Glorieuse
171, rue de l'Université
75007 Paris (FRANCE)
C.C.P.: 21 228 53—E—Paris

日本語版は，下記の所でも取り扱っております。
静岡県志太郡岡部町内谷581の2
岡部聖母保育園内
光栄の十字架の友
〒421—11

発行日	1985年9月14日 十字架称賛の祝日
訳 者	トマス 小野田圭志
印 刷	共立印刷株式会社